

# 上野原小学校遺跡

町立上野原小学校校舎改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



1993. 3

上野原町教育委員会

# 上野原小学校遺跡

町立上野原小学校校舎改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1993. 3

上野原町教育委員会

# 序

上野原小学校・月見ヶ池周辺一帯は、古くから縄文式土器の出土地帯として、多くの人に知られています。近隣で出土したという完形品は、縄文時代の逸品として東京国立博物館に保存されていると聞いています。

平成元年、上野原小学校増築工事に伴い多数の縄文式土器などが発見されました。工事関係者のご理解とご協力を得て発掘調査が行なわれ、出土品の中には貴重の名に値する遺物が数多くありました。

その一つは土笛状土製品の完形品です。吹き口と音程を調整するためのものと思われる1個の指押さえ穴という至って簡単なものです、不遜と思いつつ口にし、さまざまに工夫を凝らし発音を試みましたが、息音がスースーと空しく鳴るのみで、縄文時代の楽音の再現にはなりませんでした。

二つ目は発掘された土器文様の特殊性です。とくに把手部の文様は見る角度によって獅子頭とも、鬼面とも、女性の体形の一部を表現したものと思われるもの、信仰の対象としてか、頭の部分を三角形で強調した蛇の文様等、数千年前の縄文人がどんな思いをこめて、この土器を作ったかということに想いを馳せたとき、彼らの生活が走馬灯のように脳裏を駆けめぐり、古代へのロマンは尽きません。

今回の発掘で得られた遺物は縄文中期を中心としたものですが、その文化サイクルが一千年前から二千年前の長期にも及ぶということを耳にしたとき、あわただしい現代社会に生きる私どもにとっては、想像を絶するものがありました。

発掘調査にあたり工事関係者の温かいご理解とご協力、発掘関係者、遺物の整理にあたって下さった皆様方に深い謝意を表し、序といたします。

上野原町教育委員会  
教育長 遠藤 誠三

## 例 言

- 1 本書は山梨県北都留郡上野原町上野原地内上野原小学校遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、上野原小学校校舎改築工事に伴う事前調査で、平成元年11月17日～27日まで実施した。
- 3 発掘調査は、上野原町教育委員会が実施した。その組織はつきの通りである。
- 調査担当 小西直樹（上野原町教育委員会社会教育課）
- 参加者 荒井 泉、荒井一郎、荒井貞、荒井姫代、安藤市江、安藤盛平、有井直美、  
　上條龍子、杉本すきい、出羽和夫、豊田ヨシ江、奈良義夫、半田徳雄、藤本健治、  
　水越桂子、山下芳信、和智幹一、  
　（整理作業）小俣笑子、小俣道子、古根村典子、清水峰子、水越桂子、山口恵子
- 4 本報告書の編集、執筆は小西が行った。なお、石器の実測は上原 学（前上野原町教育委員会文化財主事）が行った。
- 5 石材の鑑定は、上杉 陽氏、中井 均氏（都留文科大学地質学教授）のご教示によった。
- 6 本報告書に関わる出土品、記録図面等は一括して上野原町教育委員会が保管している。
- 7 発掘及び整理作業にあたってはつきの機関、および方々のご指導やご協力を賜った。記して感謝申し上げます。山梨県学術文化課、山梨県立埋蔵文化財センター、坂本美夫、新津健、上杉 陽、中井 均、奈良泰史、杉本正文、田中悟道、河野喜映（敬省略）

## 凡 例

- 1 遺物の縮尺は各挿図中に記した。
- 2 土層図、断面図の「　　m」といった数字は、標高を表す。
- 3 挿図中の遺物番号と、写真図版中の遺物番号は一致する。
- 4 写真図版中の —— 線は、各遺物の表裏関係を示す。

# 目 次

序

例言

第Ⅰ章 遺跡の位置と周辺の環境	1
第Ⅱ章 調査に至る経緯と経過	3
第Ⅲ章 遺跡の層序	6
第Ⅳ章 出土遺物	7
第1節 縄文時代	7
(1) 土器	7
(2) 土製品	26
(3) 石器	28
第2節 古墳時代	35
第Ⅴ章 まとめ	36
第1節 土器	36
第2節 土器の出土状況	37
第3節 石器の石材について	40

## 挿図目次

第1図	遺跡の位置と周辺の遺跡	2
第2図	発掘区の位置	4
第3図	周辺の地形と発掘地点	5
第4図	発掘区全体図	5
第5図	発掘区南壁（A区・F区）土層断面図	6
第6図	早期・中期の土器	7
第7図	中期の土器	10
第8図	中期の土器	11
第9図	中期の土器	12
第10図	中期の土器	13
第11図	中期の土器	14
第12図	中期の土器	15
第13図	中期の土器	16
第14図	中期の土器	17
第15図	中期の土器	20
第16図	中期の土器	21
第17図	中期の土器	22
第18図	中期の土器	23
第19図	中期・後期の土器	25
第20図	土製円盤・土偶他の土製品	27
第21図	石器・スクリーパー	28
第22図	打製石斧	31
第23図	打製石斧	32
第24図	石匙・礪器	33
第25図	磨石盤・石皿	34
第26図	磨製石斧・石錐・石棒	35
第27図	古墳時代の土器	35
第28図	遺物出土状況（平面図）	38
第29図	遺物出土状況（断面図A区・F区）	38
第30図	土器棲合状況	39

## 表目次

第1表	土製円盤一覧表	26
第2表	石器一覧表	29

## 図版目次

図版1	遺跡航空写真、発掘区遠景
図版2	発掘区近景、土層断面、遺物出土状況、調査風景
図版3～5、7～8	出土土器
図版6	出土石器

# 第Ⅰ章 遺跡の立地と周辺の環境

上野原小学校遺跡は山梨県東端、相模川上流域（桂川）にあたる。富士北麓に源を発した桂川は、道志、丹沢山地の周縁を大きく迂回して神奈川県で相模川と名を変え相模湾に流れ込んでいる。右岸の道志、丹沢山地に目立った支流はないが、左岸には南北方向に大きな支流が見られる。すなわち、大菩薩山系を源とする葛野川と、小仏山系を源とする鶴川がそれである。各支流はさらに樹枝状の水系を伴って山地を開拓し狭小な河岸段丘地形を形成しており、桂川流域の特色ある景観を呈している。上野原町内の河岸段丘は高位、中位、低位の3段に大別されており、とくに中位段丘は最も広範囲に分布しており標高は265～390mである。上野原小学校遺跡は中位段丘の中では最も広大な平坦地をもつ上野原面に位置する。南は桂川、西は支流の鶴川で囲まれており、本遺跡との比高差は約100mである。周辺は旧甲州街道の宿場町として栄え、昭和30年の町村合併以前より旧町役場や小学校といった公共施設が建てられるなど上野原の中心街として発展してきた地域である。

本遺跡の位置する上野原町は面積の8割近くを山林で占められるため、遺跡は河川沿いに断続的に発達した河岸段丘上を中心に分布している。これまでに確認された遺跡数は100ヶ所近くにのぼるが、とくに縄文時代の遺跡数が多くなっている。本遺跡の位置する台地上では、段丘背後の山麓部に遺跡が多く確認されている。上野原小学校遺跡を含め根本山遺跡（2）、桜ヶ丘遺跡（3）、西シ原遺跡（9）、大堀I、II遺跡（7、8）、山風呂遺跡（10）、向風I、II遺跡（11、12）が点在しており、縄文時代、および平安時代の遺物散布地とされる。大堀遺跡では平安時代の堅穴住居址2軒が発掘されている。

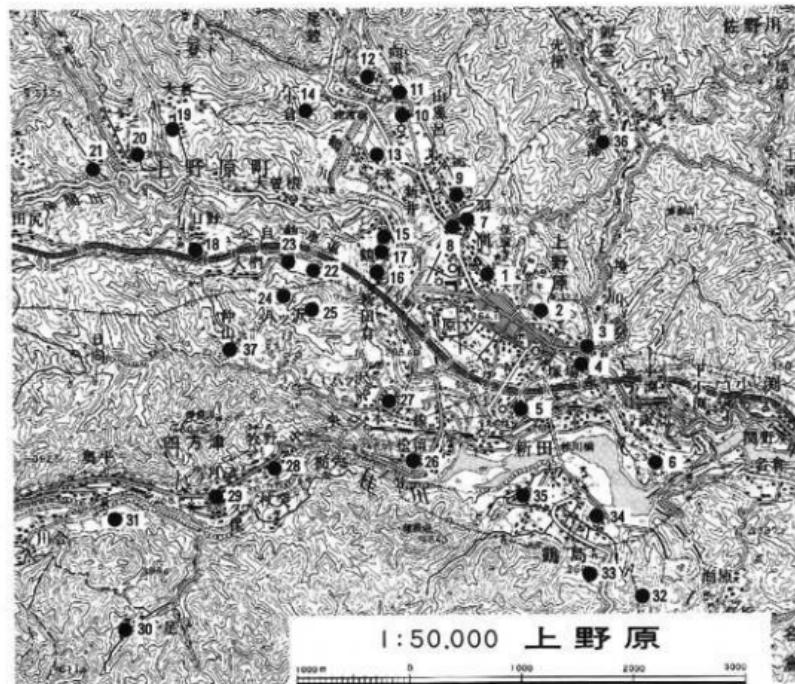
この他、桂川本流域で発掘調査された町内の遺跡ではつぎの2遺跡が挙げられる。関山遺跡（5）は上野原小学校遺跡の南方約1kmの段丘南端に位置し、縄文中期堅穴住居址1軒の他、土坑、集石、配石が発見された。住居址出土土器は曾利二期が中心で連弧文土器が伴なうものであった<sup>(註1)</sup>。川合遺跡（31）は桂川右岸の河岸段丘上に位置する。縄文中期曾利式期の堅穴住居址2軒、土坑4基が発見された<sup>(註2)</sup>。両遺跡とも、住居址には石匂炉と埋甕が伴うという該期の典型的な住居構造を備えている。

このように桂川本流域に点在する河岸段丘上では縄文中期、および平安時代を主体とした集落が発見されてきている。これに類する状況は下流の嵯峨遺跡（津久井郡藤野町）でも認められ<sup>(註3)</sup>、本流域における一般的な様相と言えるだろう。

（註1） 中山誠二他『関山遺跡I、II』山梨県埋蔵文化財センター 1988

（註2） 田中信道『川合遺跡、関山遺跡』上野原町教育委員会 1989

（註3） 滝澤亮他『藤野町嵯峨遺跡』藤野町教育委員会 1987



番号	遺跡名	時期	番号	遺跡名	時期
1	上野原小学校跡	縄文早・後期	19	大倉遺跡	縄文早・後期, 平成, 古墳, 平安
2	樅木山道跡	縄文早・後期, 平安	20	芦垣遺跡	縄文早・前・中期, 平安
3	桜ヶ丘遺跡	縄文, 平安	21	瀬端遺跡	縄文早期
4	塚場古墳群	古墳	22	南大浜遺跡	縄文中期
5	闇山遺跡	縄文, 平安	23	大浜遺跡	縄文中期
6	狐原遺跡	縄文早・後期	24	人們I遺跡	縄文早・後期, 平安
7	大堀I遺跡	縄文中期	25	大堀II遺跡	縄文早期
8	大堀II遺跡	縄文早・中期, 古墳	26	松畠遺跡	縄文後期
9	西シ原遺跡	縄文早・前中期	27	八ツ沢遺跡	縄文中期
10	山風呂遺跡	縄文前期	28	牧野I遺跡	縄文中期, 平安
11	向風I遺跡	縄文中期	29	当月遺跡	縄文前・中期
12	向風II遺跡	縄文中期・後期, 泰良, 平安	30	千足遺跡	縄文
13	八米遺跡	縄文中期	31	川合遺跡	縄文
14	小倉遺跡	縄文早・前中期	32	黒ノ木遺跡	縄文中期・後期, 平安
15	上野山I遺跡	縄文後期	33	田代遺跡	縄文中期
16	上野山II遺跡	縄文中期・後期, 幼生	34	東区遺跡	縄文中期
17	上野山古墳	古墳	35	駒門遺跡	縄文中期, 幼生後期
18	日野富士塚遺跡	縄文早・中期	36	奈須部遺跡	縄文早・中期, 古墳
			37	赤山遺跡	幼生

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

## 第Ⅱ章 調査に至る経緯と経過

上野原小学校遺跡は昭和初期に校庭拡張工事に伴って発見され、これまでに縄文時代中期、後期を中心に遺物の出土が報告されてきた遺跡である。大半の遺物は散逸してしまったようだが、掘之内式の注口土器が完形品として残されている<sup>(註1)</sup>。

平成元年10月、校舎増築および水泳プール施設建設工事に伴い、工事排土中に多量の土器片が確認された。このため上野原町教育委員会では山梨県文化課（現在学術文化課）、上野原町役場施設維持課の3者で対応策を協議し、校舎増築予定地（旧上野原小学校講堂跡地）約1,000m<sup>2</sup>について試掘調査を実施することになった<sup>(註2)</sup>。

試掘調査は11月13日～15日にかけて実施した。巾1mの試掘溝を十字に設定し、重機を併用して掘り下げた。調査地は明治時代に建てられた旧町役場（木造）、ついで昭和36年に建てられた上野原小学校講堂（鉄筋平屋建）跡地であったため、調査区東側を中心にローム層まで削平された状況であった。しかし、旧地形が西へ下る斜面地であったため西側ほど土層の堆積が厚くなっている、地表下1m～1.5mで遺物包含層を確認できた。遺物は縄文中期の土器片、石器（石錘）が出土した。遺構は無かった<sup>(註3)</sup>。

以上の結果を踏まえ、発掘調査は校舎増築予定地西側を重点に新校舎建設で破壊される100m<sup>2</sup>について実施することとした。

発掘調査は平成元年11月17日～27日まで実施した。発掘区は当初5m区画のグリットを4個設定し、南からA、B、C、D区とした。調査開始後さらに東側に2個のグリットを拡張し、E、F区としたため、発掘総面積は150m<sup>2</sup>となった。発掘区の長軸は新校舎の計画にあわせ磁北より8°東へずらしている。

11月17日（金）発掘区を設定する。整地層（I層）、旧表土（II層）を重機で剥ぐ。

18日（土）遺物を包含するIII層上面の精査、および掘り下げを始める。土器片の出土がおびただしいため、小破片については5m四方のグリット単位で一括して取り上げながら掘り進める。

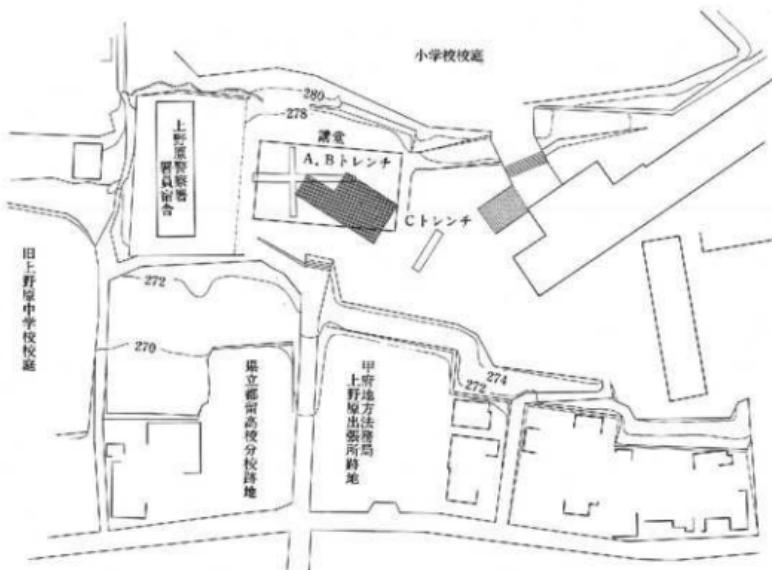
19日（日）遺物の出土状況を写真撮影し、平面実測図を作成する。

20日（月）実測遺物の取上げと平行して、IV層下を2.5m四方の市松模様に掘下げる。

21日（火）IV層掘り下げ。

22日（水）IV層を掘り下げるとともに、発掘区の東側10mに試掘溝（Cトレーンチ）を設定して掘り下げる。

23日（木）作業休み。上野原町埋蔵文化財調査会で今後の調査について協議する。



第2図 発掘区の位置(網がけ部)

24日（金）IV層中は遺構は無く遺物も少量であったため、掘り下げを市松模様のままで終了する。全景写真を撮影する。一方、Cトレンチは旧斜面が急激に落ちこむうえ遺物の出土も散発的であったため調査を終了する。

25日（土）発掘区を東側に25m<sup>2</sup>拡張（E, F区）し、表土剥ぎを重機で行う。

26日（日）E, F区を掘り下げる。整地によりローム層まで削平された範囲が広く、遺物の遺存状況は悪い。

27日（月）E, F区をローム層上面まで掘り下げる。この結果、遺構は無かった。終了全景写真を撮影して全体の調査を終了した。

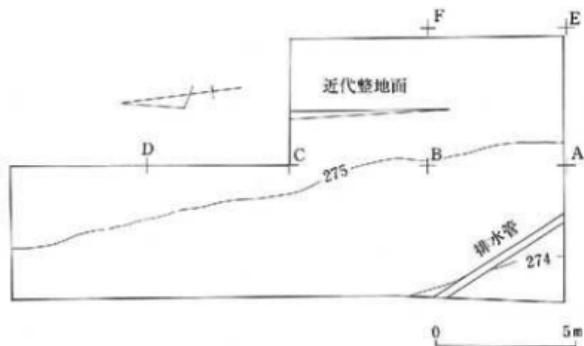
（註1）これまでの遺跡総合については『上野原町誌』1975、『甲斐志料集成』に詳述されている。

（註2）上野原小学校は明治9年に校舎本館が完工されて以来、校舎の増改築や運動場の拡張が度々行われてきている。

（註3）平行して水泳施設予定地（旧山梨県法務局上野原出張所跡地）の試掘調査も実施した。地表下約1m前後の旧表土中から縄文中期の土器片5点、および土師器片3点、須恵器片1点、灰釉陶器片1点が混在して出土した。遺構は無かった。



第3図 周辺の地形と発掘地点 (○印)



第4図 発掘区全体図

### 第III章 遺跡の層序

調査地は上野原小学校敷地内に位置する。第II章で述べたように近年までたびたび土木工事の繰り返された場所であった。このため地表はかなり整地・削平されていたが、旧地形が南西方向に傾く斜面地であったため調査地西側では遺物包含層を含め5層を確認することができた。地山はローム層であった。ローム層上面における最大傾斜は約30°、A、F区間で約2m下っている。

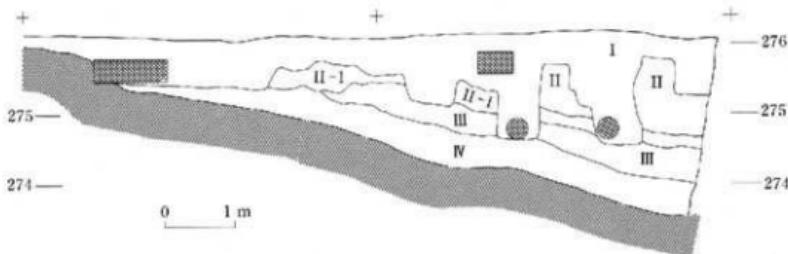
**第I層 表土。**現代の整地層であり、コンクリート塊や砂利を含む他、排水管が埋設されている。調査地東側では整地がローム層にまで達しており、III層とIV層で擾乱されたと思われる縄文時代の遺物が混入している。層厚はおよそ50cm程度である。

**第II層 暗褐色土。**旧表土である。締まり粘性とも弱く、5mm以下的小礫を多く含む。層厚は斜面下方で厚く、最大130cmであった。

**第II-1層 黒褐色土。**締まり粘性とも弱く、5mm以下の小礫を多く含む。第II層に由来する暗褐色土塊(1cm~10cm大)を含む。調査区内南側で確認された層であり、層厚は20cm~50cmである。

**第III層 褐色土。**締まりやや強く、粘性は弱い。燈色スコリア(1mm~5mm大)、炭化粒(3mm以下)を多く含む他、小礫(1cm以下)をやや多く含んでいる。縄文時代早期~後期の遺物、とりわけ中期の遺物を多量に含む層である。層厚はおよそ50cmである。

**第IV層 黒褐色土。**締まり、粘性ともやや強い。富士黑色土層(FB)にあたるものと考える。燈色スコリア(1mm~5mm大)、炭化粒(3mm以下)、小礫(1cm以下)をやや多く含んでいる。層厚はおよそ50cmである。縄文時代の遺物を含むが、量的には第III層に比べ少なくなっている。第III層との間に遺物の時期差は認められない。



第5図 発掘区南壁(A区・E区)土層断面図

## 第Ⅳ章 出土遺物

本遺跡からは、縄文時代、および古墳時代の遺物が出土したが、ほとんどは縄文中期、後期の土器、石器で占められる。その数量も調査面積150m<sup>2</sup>と小規模のわりには膨大なものとなっており、土器片の総点数は細片を含め約6,000点、224kgに達する。遺物は、最大傾斜30°を測る斜面が一段テラス状になった場所で集中して出土した。出土層位はⅢ層、Ⅳ層を中心で、旧斜面上方にあたるE、F区では整地層を伴うⅠ層からも出土している。

### 第1節 縄文時代

(1) 土器。深鉢を中心につぎのように分類、報告する。

第Ⅰ群 縄文早期の土器群。押形文土器と貝殻条痕文土器がある。

第Ⅱ群 中期前葉の土器群。貉沢、新道式期に位置する。

第Ⅲ群 中期中葉の土器群。藤内、井戸尻式期に位置する。

第Ⅳ群 中期後葉の土器群。曾利式期に位置する。

第Ⅴ群 浅鉢形土器。

第Ⅵ群 壺形土器。

第Ⅶ群 後期前葉の土器群。称名寺、堀之内式期に位置する。

第Ⅷ群 後期中葉の土器群。加曾利B式期に位置する。

第Ⅰ群 縄文早期の土器群を一括した(第6図)。

押形文土器(1)、山形施文が1点出土した。

貝殻条痕文土器(2)、1点出土した。繊維を多量

に含み外面に条痕文が施される。

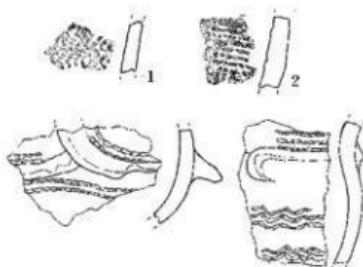
第Ⅱ群 中期前葉の土器群を一括した(第6図欠番、第7図3~9、24、25)。

第1類 隆帯沿いに半裁竹管による押引き文、ないしは刺突文を施す(第6図欠番、第7図3、4)。欠番は深鉢頸部、胴部片。胴部は連続山形状に施す。金雲母が目立つ。3、山形突起を持つ内湾口縁部である。貼付紐は部分的に刻目をもつ。4は橋状把手で連続刺突文が巡る。

第2類 ほぼ直線的開く深鉢である(5~9)。口縁部、胴部に隆帯による三角形状区画を設け、隆帯脇にキャタピラ文、波状沈線を施す。器面は剥落が目立つ。

第3類 底部(24、25)。24、わずかに脹らむ底部側面に斜繩文を施し、その上限をベン先状工具による波状押引き文で区画する。25、楕円横帶区画中にキャタピラ文を施す。

本群は貉沢、新道式期に位置するものであろう。



第6図 早期・中期の土器(1/3)

第三群 中期中葉の土器群を一括した（第7図～第14図）。

第1類 藤内式期に位置する土器群を一括した（第7図10～23、第8図、第9図）

a種 口縁部に三角形状の区画をもつ土器群である。10～13、内湾口縁の深鉢である。口縁部に設けられた三角形状の区画中を巾広のキャタピラ文や三叉文、玉抱き三叉文、波状沈線で充填する。36、深鉢である。内湾する口縁部に隆帯による三角形状の区画を設け、区画中をキャタピラ文、三叉文、縦位沈線で充填する。胴部は繩文が施される。口縁部に付く把手は、外面は1孔、内面は双孔となっており、外面は孔を巡って刻目をもつ隆帯が巡る。

b種 縦位区画文をもつ土器群を一括した。14～18は胴部に縦位区画文をもつ深鉢である。区画は半裁竹管の内側で施文された半隆帯によるもので、同様な施文は19にも認められる。15～17は、長方形区画中を横、ないし斜位の沈線で充填する。17はキャタピラ文をもつ隆帯によって無文部と区画される。14、18は、屈曲する隆帯が加えられ、これに沿ってキャタピラ文、三叉文、波状沈線が施される。29、Y字状隆帯に沿ってキャタピラ文、波状沈線を施し、隆帯の交点には円環状貼付文を加える。

c種 口縁部に弧状の隆帯をもつ土器群を一括した。21は内湾するゆるやかな波状口縁部であり、キャタピラ文をもつ低平な隆帯を巡らす。35、口縁部で内湾する深鉢。隆帯上は巾広のキャタピラ文、矢羽状連続刺突文を施すが口縁部では部分的に無文とする。隆帯の交点に双孔把手が付く。

d種 指円横帯文を頸部、ないしは口縁部にもつ土器群を一括した。31～34は同一個体と考えられる深鉢である。口縁部に双孔把手をもち、頸部は隆帯により区画された指円横帯文が巡る。区画中は、三叉文と縦位沈線文、三叉文と波状沈線文、渦巻状沈線文でそれぞれ充填される他、無文区画も見られるなど文様構成が各区画によって異なっている。色調は燈褐色である。

37～39、胴部は繩文。区画中は縦位条線（39）、格子目条線（38）で充填される。38の口縁部には山形突起が付く。37は口縁部で直立する深鉢で、口縁部に渦巻状隆帯を伴った把手をもつ。指円横帯区画は渦巻状、あるいは交互の短沈線で埋められる。

e種 抽象的文様をもつ土器群を一括した。22、23は無文地に、沈線とキャタピラ文による抽象的文様をもつ。22は三角刻印文が加えられた毛虫状の文様、23は該期特有の「サンショウウオ文」と呼ばれる文様構成と同一のものであろう。

f種 繩文を主とする土器群を一括した。27、口縁部が大きく開く深鉢である。口縁部に斜位沈線が施された突起が付く。口縁部は無文、胴部は波状沈線下に縦位の繩文を施している。26、斜繩文を地文とし、波状沈線、キャタピラ文が施される口縁部である。

g種 繩文、隆帯による文様をもつ土器群を一括した。19、斜繩文、竹管内面による半隆帯、キャタピラ文をもつ。20、Y字状隆帯にキャタピラ文と、左右交互からの刻目が加えられる。

胴下半部は縦位の縄文を地文とする。

h種 胴部を無文とする深鉢(30)である。口縁部に山形突起が付く。口唇直下に波状沈線、キャタピラ文を巡らし、刻目に入った隆帶が垂下する。外面には輪積痕に沿って指頭痕が残る。器面はひしやげてひび割れが目立っており、胎土はたいへん粗雑である。焼成時の未製品と考えられる。色調は明褐色、灰色である。

i種 小型の深鉢(28)である。口縁部を無文とし、この直下よりベン先状工具による三角列点文を縦位に施している。胎土は金雲母が目立つ。色調は外面暗褐色、内面黒褐色。口縁部を無文とする点や、胴部を縦方向の文様で構成する点などから本類に含めた。

第2類 井戸尻式期に位置する土器群である(第10図～第13図)。

a種 太沈線と隆帶により文様が構成される深鉢を一括した。

口縁部で内湾、もしくは内折する比較的大型の深鉢のうち、口縁部には三角形状の把手(40、43、47)や、円環状の小把手を3方に配し、一方に中空の大把手を付ける(48)ものがある。40は口縁部を縦位、斜位の隆帶で区画し、区画中に円形、U字状、縦位の条線を浮彫風に施す。41・47は口縁部から胴部にかけて隆帶で区画し、区画中には円形、渦巻、三叉文様を浮彫風に施すものであるが、41の施文は粗雑で簡略的である。42は胴上半部に隆帶による三角区画を巡らせ、三叉文で充填する。胴部は斜縄文。43は口縁部に短沈線、胴上半部は隆帶で区画した中を条線、あるいは無文としている。48は貼付紐により主文様を構成する。大把手には太沈線による浮彫風の文様をもつものあり、胎土は砂粒を多く含み脆弱である。

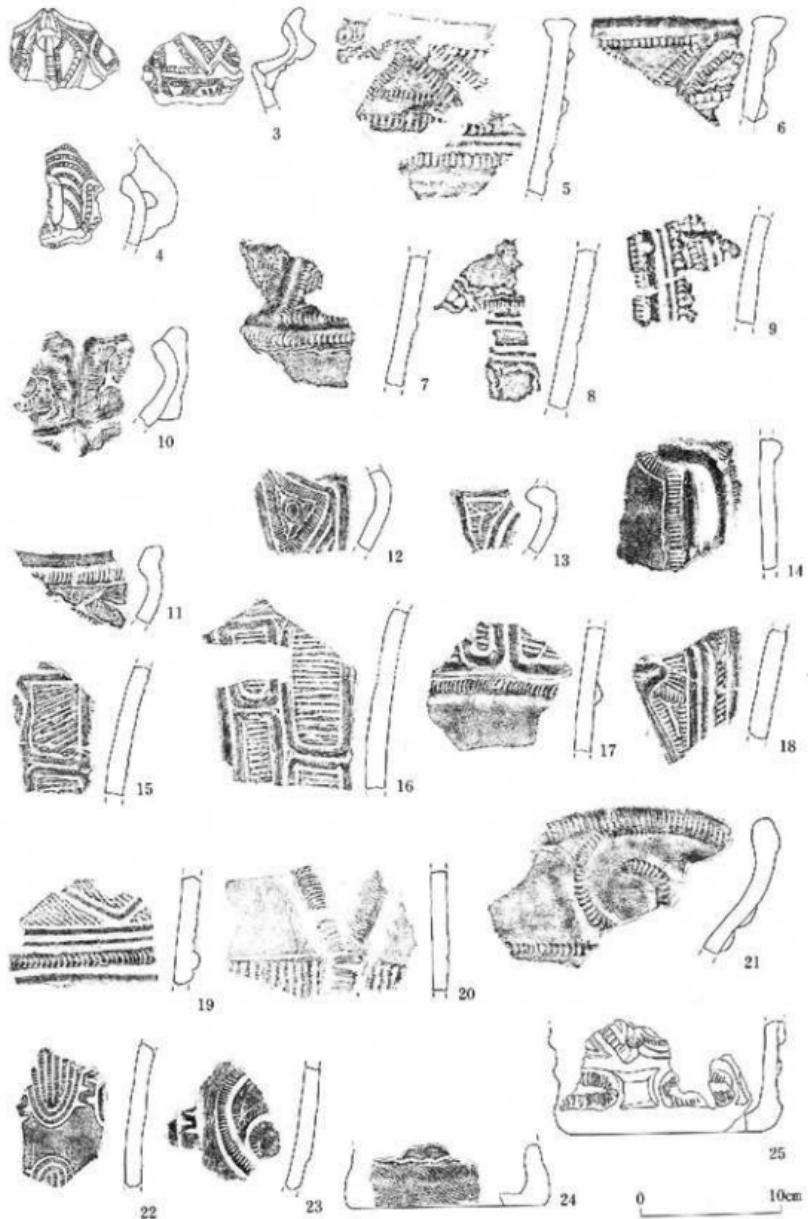
口縁部ないし胴上半部に配された主文様の下限は、浮彫風の半隆帶(40、47)、刻目をもつ隆帶(43、48)、器面調整時の撫で方向の違い(41)でそれぞれ区画される。

56～63は太沈線による三叉文、および隆帶を特徴とする深鉢破片である。56はほぼ直線的に開く口縁部、57～59は内折する口縁部で三角形状の把手が付く。他は胴部破片。62は半隆帶と沈線により無文部と区画される。

44、67、68は強く屈曲する底部である。44は、連弧状の隆帶で囲まれた中を短沈線で充填する。67、68は隆帶による梢円横帯区画中に縦位沈線を施すものである。

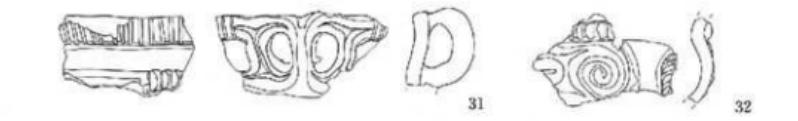
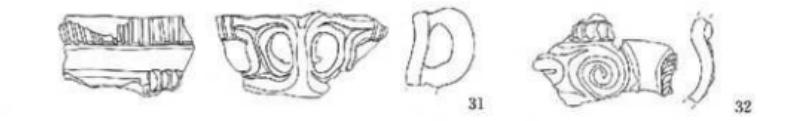
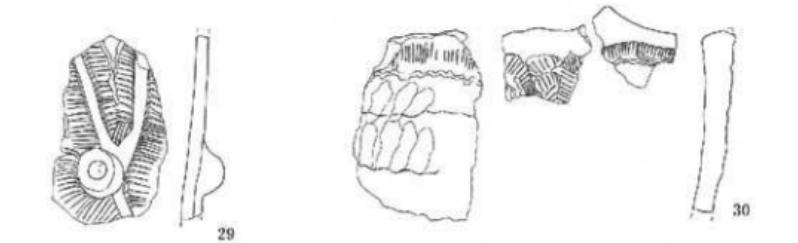
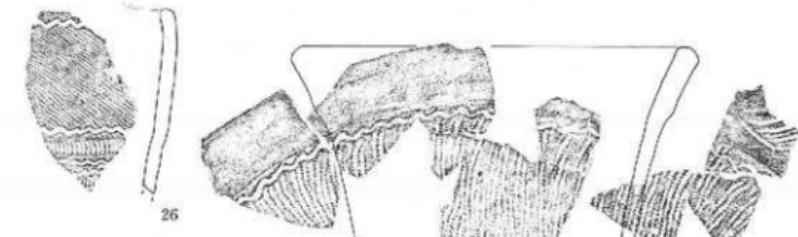
b種 縄文あるいは撫糸文が主に施される深鉢を一括した。口縁部で内湾し胴部でくびれるキャリバー形(49～51、53)と、胴部のくびれない形(52、54、55)がある。

キャリバー形深鉢のうち49～51には把手が認められる。とくに49は中空の大把手である。把手外面には三角状の双孔と大小の円環状双孔を配し、内面にも双孔を配している。さらに外面には太沈線を加えた隆帶が施され、あたかも双孔を頭にした2本指の生き物が両手を大きく広げたような文様構成である。50、51は円環状の把手を伴い、50にはさらに中空把手、双孔把手をもち、刻目をもつ隆帶が垂下する。53は口縁部を無文とする。



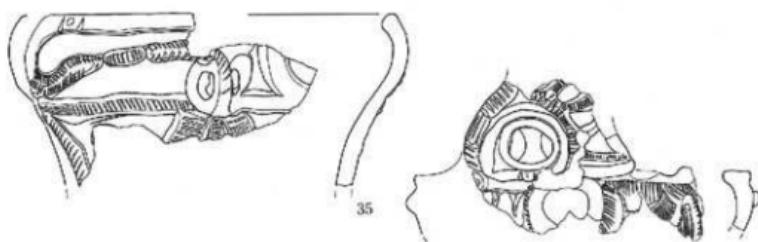
第7図 中期の土器 (1/4)

— 10 —



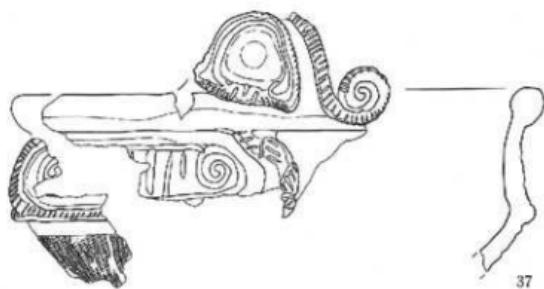
0 10cm

第8図 中期の土器 (1/4)

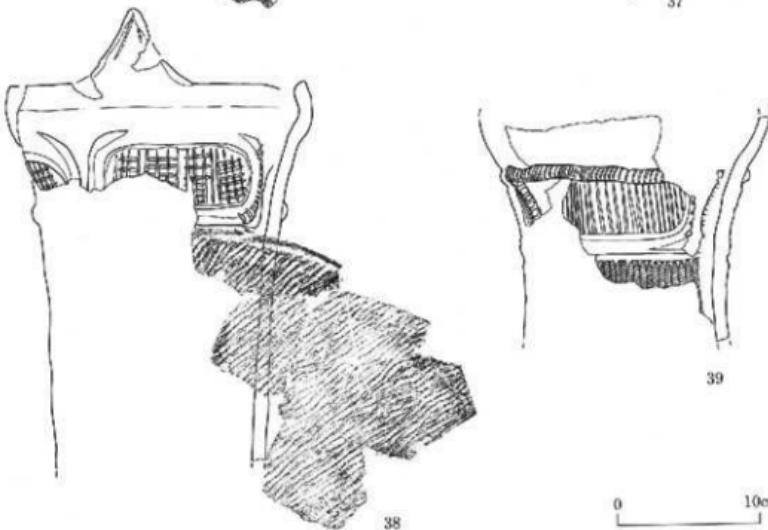


35

36



37

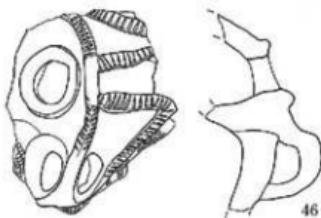
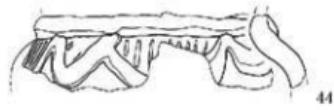
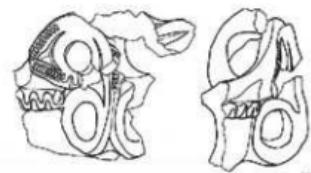
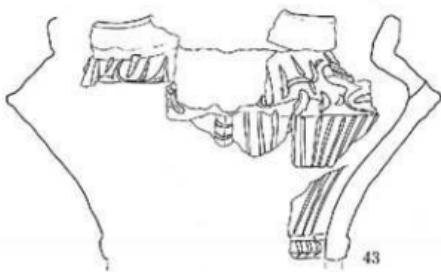
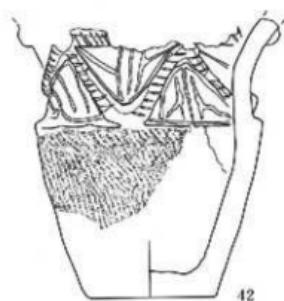
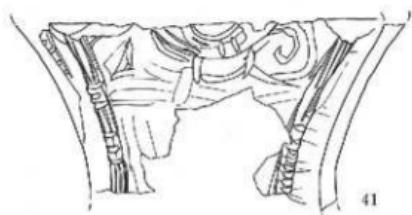
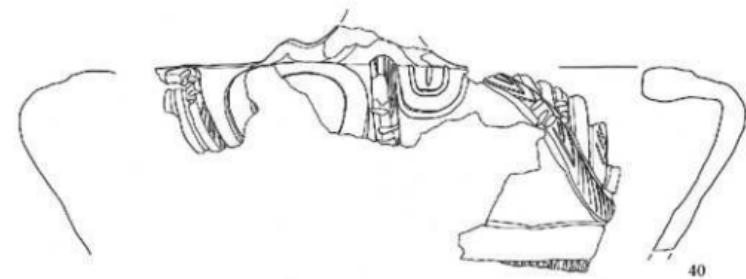


38

39

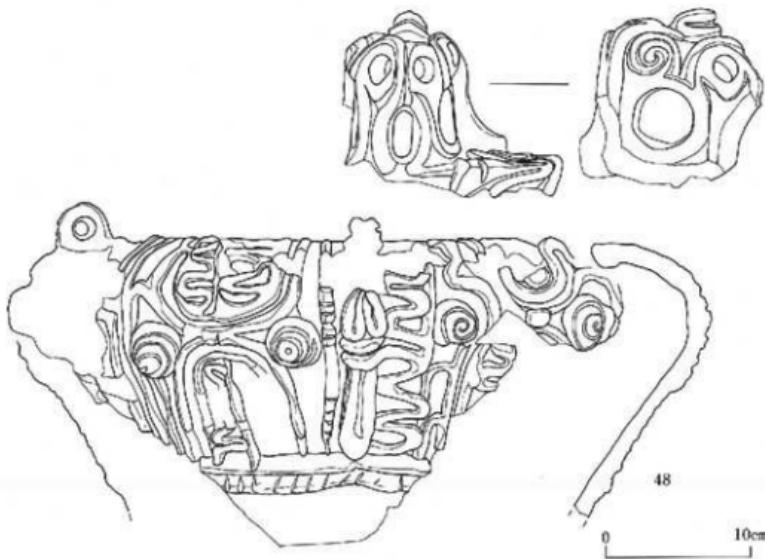
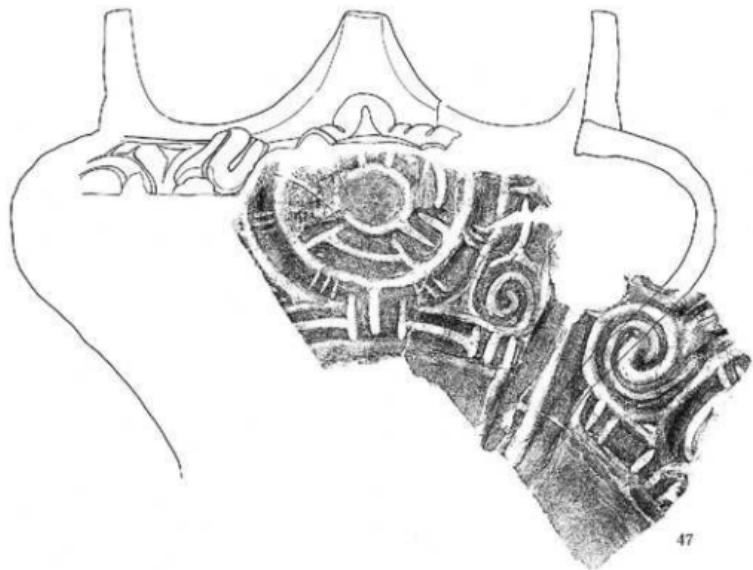
0 10cm

第9図 中期の土器 (1/4)

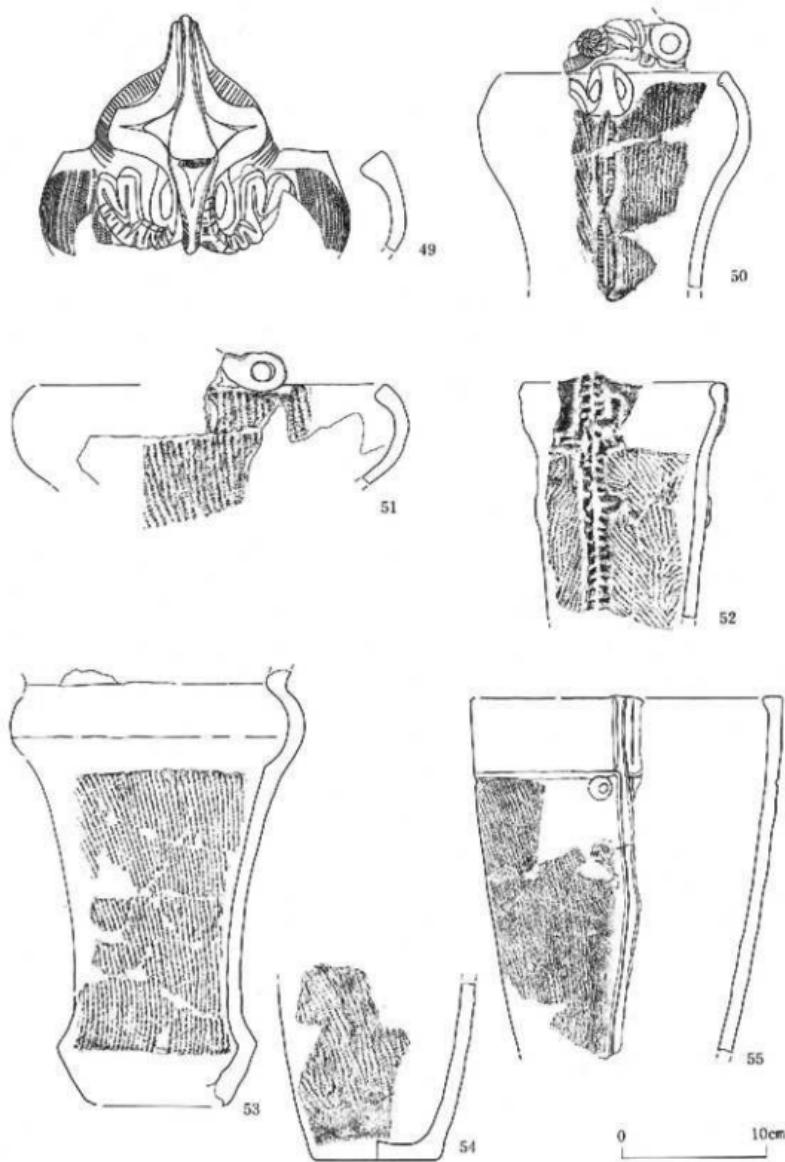


0 10cm

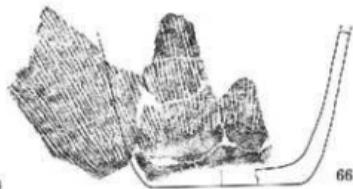
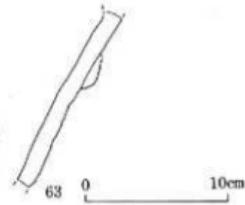
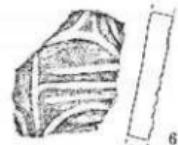
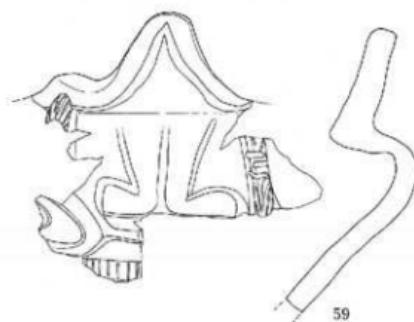
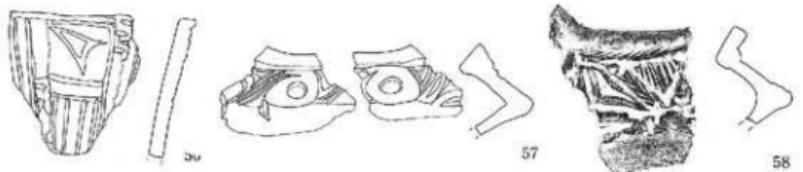
第10図 中期の土器 (1/4)



第11図 中期の土器 (1/4)



第12図 中期の土器 (1/4)



第13図 中期の土器 (56~63 1/4, 64~68 1/6)



69

70

71



72



73



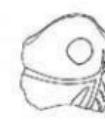
74



75



76



77



78



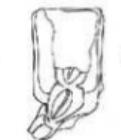
79



80



81



82



83



84

0 10cm

第14図 中期の土器 (1/4)

52、刻みをもつ隆帯が施され、胴部は斜縄文、口縁部は無文とする。54は52と胎土、焼成文様で類似する。55、隆帯および沈線が施され、胴部は撚糸文、口縁部は無文とする。破片端部に焼成後の穿孔が1ヶ所認められる。

64～66は深鉢の底部。いずれも縦位の縄文が施される。底径は64が8cm、66は16cmである。

第3類 口縁部に付く把手部を一括した(第10図45・46、第14図)。

45、46は外面に双孔と1孔、内面に双孔をそれぞれ配する把手部である。45の口縁部は無文、46は縄文が施される。69～73は双孔、74～77は円環状である。78、79は蛇体文である。78の蛇体文は双孔に巻き付く形で配され、口を上方に向けて大きく開けている。79に口の表現は見られない。80、81は筒状の中空把手であり、80は輪積痕が明瞭である。82は搭状把手であり、連鎖状隆帯を伴う。左右側面に太沈線による三叉文、及び渦巻文が施され、頂部を介して連結している。83は団扇状の大把手である。頂部に小孔をもち、三叉文、短沈線を主な文様要素とする。外面には矢羽状、左右交互からの刻目をもつ隆帯が付く。内面は皿状の凹みをもつ。90は顔面把手で、頭部には沈線による三叉文、渦巻文を配する。現存高10cm、巾15.3cmである。

第IV群 中期後葉の土器群を一括した(第15図、第16図、第19図123～128)。

第1類 貼付紐と条線により文様が構成される深鉢である(93～103)。曾利様式「籠目文土器」と呼ばれる土器群にあたる。口縁部は大きく外反し、口唇部が強く内折する(93～97)。胴部は弱くふくらむ形となる。口縁部の文様は、大きく弧状をなす条線上に蛇行する貼付紐を垂下させるもの(95～97)、斜位の条線をもつもの(93)、斜位条線上に貼付紐が斜交するもの(94)の3種がある。頸部は横位の平行条線、貼付紐をもち(98～100)、98は平行する貼付紐間に斜位の条線を施す。胴部は、弧状の条線と蛇行貼付紐を伴うもの(101、102)、蛇行、および直線的な貼付紐を垂下させるもの(103)がある。胴部の地文には、縦位の条線(98、99、102、103)、斜縄文(100、101)がある。

第2類 縦位の条線間に矢羽状の連続刺突文を施す深鉢胴部の破片である(104)。

第3類 無文の深鉢口縁部である。大きく外反し口唇部が内折する(105)。

第4類 頸部に双孔把手をもつ深鉢である(119)。波状、渦巻状の太沈線が巡らされる。

第5類 口縁部に渦巻状、半円形の文様をもつ土器群を一括した(106～110、112、122)。口縁部の文様構成により3種(a～c種)に分けられる。

a種、渦巻文、あるいは梢円文を横に連ねたもの(107～109、122)。沈線によるものである。122は、ふくらむ胴部に緩く外反する口縁部が付く深鉢である。平行沈線による縦長の区画を設け、区画中を横、斜位の条線で充填する。色調は暗褐色。

b種、横位の平行線と渦巻文が連結するもの(106、110、120)。貼付紐と沈線とがある。沈線によるもの(106)は、緩く外反する口縁部をもつ。口縁部より蛇行沈線文が垂下し、縦

文が施される。破片端部に焼成後の穿孔が1ヶ所認められる。貼付紐によるもの(110、120)は、内湾口縁部をもち地文は撚糸文である。120は頸部に横位、波状の貼付紐が巡る。

c種、弧状ないしは半円形の区画をもつもの(112)。隆帶による区画中に条線を施す他、縦に区画された胴部には斜位の条線が施される。

113、114は胴部破片である。櫛歯状工具による斜位条線(113)、斜縄文(114)を、平行沈線による縦位の区画中に配置している。いずれも蛇行沈線文が垂下している。115は、円弧状に区画した中を櫛歯状工具による条線で充填した胴部破片である。

第6類 口縁部に平行沈線文により緩やかな波形を描く深鉢である(111、121)。111は列点文が施される。121は縄文を地文とし、沈線間は無文としている。加曾利E様式に伴う「連弧文土器」にあたるものである。

第7類 斜向する短沈線をもつ土器群を一括した(116~118)。116は口縁部から胴部にかけて沈線文により□字状に区画する。

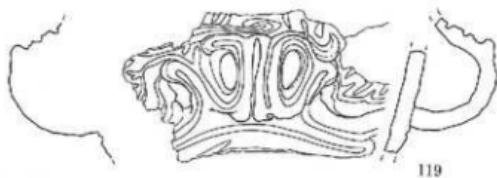
第8類 内湾気味に聞く深鉢であり、無文地に沈線文を施すものである(123)。胴部は□字状に区画される。

第9類 磨消縄文をもつ土器群を一括した(124、125、128)。124、125は微隆起線による区画中に縄文が認められる。124は波状口縁であり、口縁部に2列の刻目を巡らしている。128は内湾口縁部で、沈線文により区画される。

第10類 深鉢底部を一括した(126、127)。126、条線文。127は円弧状の微隆起線を巡らすものであり、あるいは胴部が張る壺形土器とも考えられる。



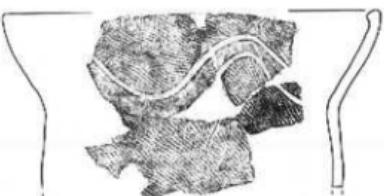
第15図 中期の土器 (1/4)



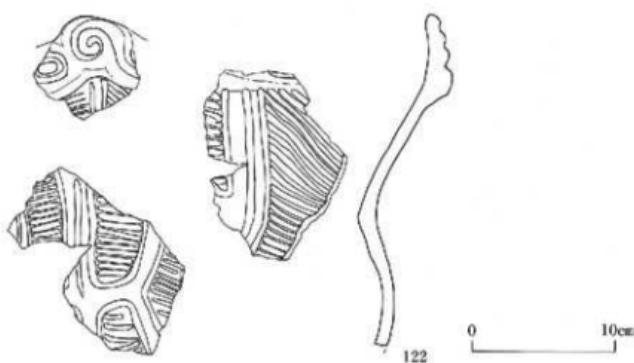
119



120



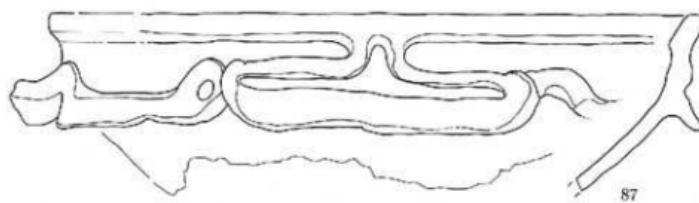
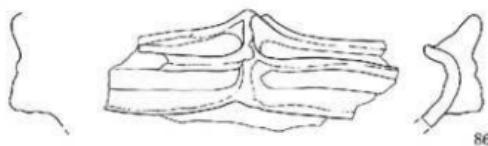
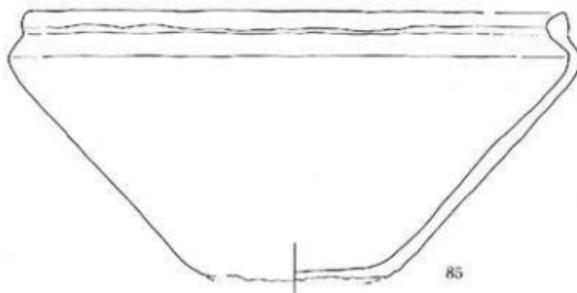
121



122

10cm

第16図 中期の土期 (1/4)



0 10cm



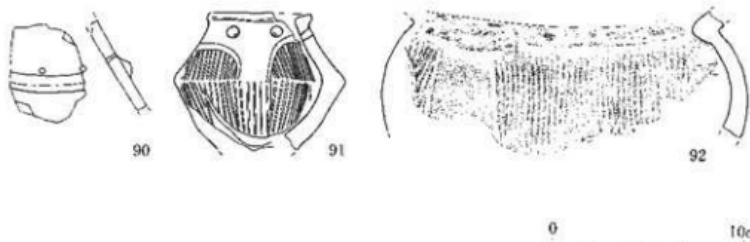
88



89

0 10cm

第17図 中期の土器 (85~87 1/4, 88~89 1/4)



第18図 中期の土器(1/3)

**第V群 浅鉢を一括した(第17図)。**

85、口縁部で短く立ち上がる器形である。口唇部は肥厚する。無文。底面は剥落している。1／2が残存する。口径38cm、底径12cm、現存高19cm。86～88は口縁部に文様帯をもつ。86、内湾する口縁部を庇状の隆帯により上下2段に区画するものである。87、内湾気味に開く器形であり、体部下半部を欠く。口縁部に庇状の隆帯を配する。口径46cm、現存高13cm。

88、内湾する口縁部に沈線文を施す。89は口縁部が強く外反する浅鉢肩部にあたるものであろう。沈線による横位楕円文に太い刺突文と細かい刻目とを加えている。刺突文は矢羽状に配列されており、棒状工具を斜めに刺突したものである。

**第VI群 壺を一括した(第18図)。**

90、有孔鍔付き土器の破片である。内外面に赤彩が認められる。91、胴部中位で屈曲する小型壺であり、現存高は7cmである。口唇部上面は平坦である。口縁部に2個の穿孔をもつ。胴部には円弧を描く沈線間を条線で充填する。1／3が残存する。90、91とも器面は平滑に仕上げられている。

92、球形の胴部から強く屈曲する頸部をもつ。広口壺と考えるが、あるいは第III群第2類b種の深鉢上半部にあたるものかもしれない。縦位の縄文を沈線と磨消により縦位に区画するものである。頸部内面には赤彩が残る。色調はいずれも外面褐色、内面黒褐色である。

**第VII群 後期前葉の土器群を一括した（第19図129～148）。**

a類 磨消繩文をもつ土器群を一括した（129～137）。口縁部はいずれも外反し、波状のものがある。波頂部には有孔の突起が付けられるもの（130）、棒状工具による押圧を加えた隆帯が垂下するもの（129）がある。磨消繩文は屈曲、あるいは二叉状になる。

b類 刺突文をもつ土器である（138）。文様構成はa類と類似する。

c類 口縁部に沈線文を主体にした文様帶をもつ土器群を一括した（139～141）。波状口縁と平縁とがある。文様は、平行沈線文に刻目、円形刺突文を加える他、140の波頂部には上下2個の貫通孔を配するもので、内外面には黒色付着物が目立つ。

d類 口縁部に継位沈線をもつ土器である（142）。直線的に外反する口縁部から胸部にかけて継位、ないしは斜位の沈線を施すものである。

e類 口縁部外面に刻目の貼付紐をもつ土器である（143～144）。直線的に外反する口縁部外面に円形の刻目を連続して加えた貼付紐を巡らし、8の字状、およびボタン状貼付文を加える。いずれも内面には平行沈線文を巡らす。

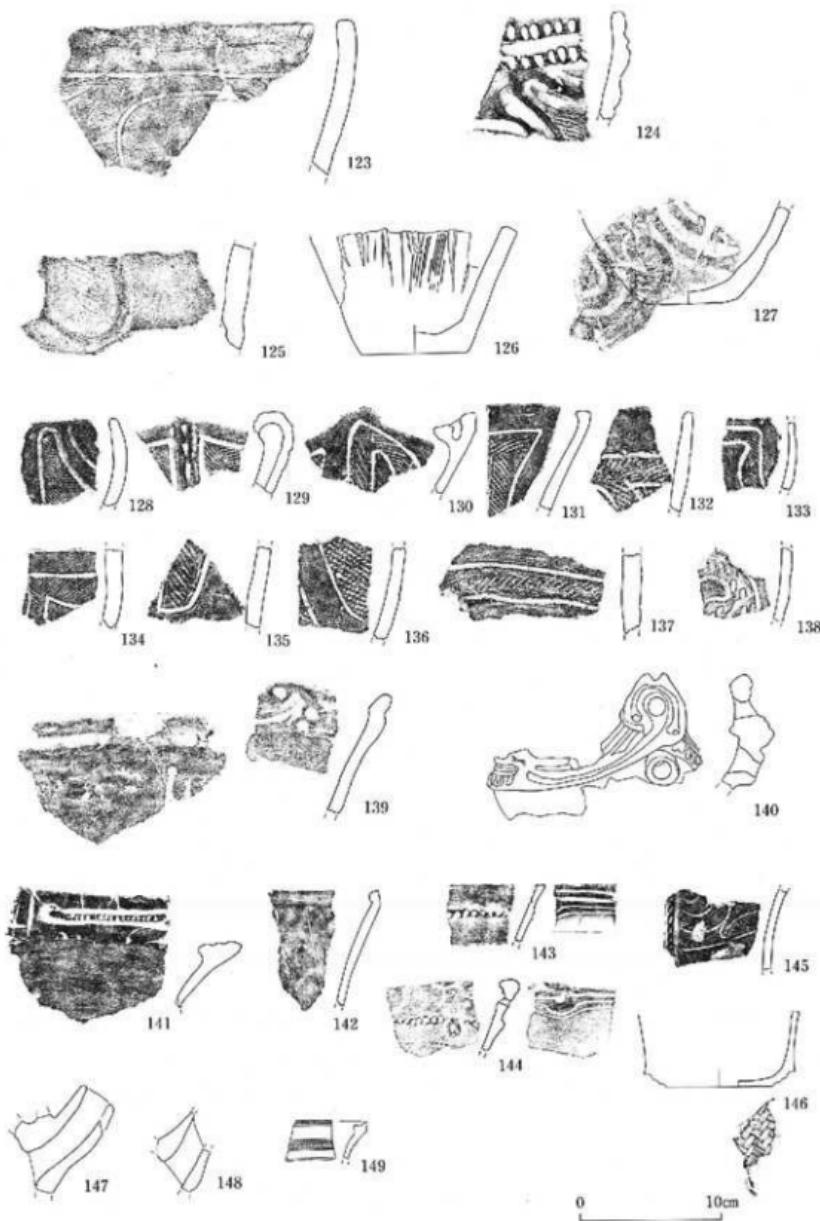
f類 刻み目を加えた貼付紐を垂下させて胸部を区画し、弧状の沈線文、磨消繩文を施すものである（145）。

g類 網代痕をもつ底部破片である（146）。

h類 注口部である（147、148）。2点出土した。

本群のうちa類、b類は称名寺式期、c～f類は堀之内式期に位置付けられる。g類、h類は胎土等から堀之内式期に位置付けられよう。

**第VIII群 後期中葉の土器群を一括した（第19図149）。**口唇部に受け口をもつ。平行沈線間に刻目を施す。本群は加曾利B式期に位置付けられよう。



第19図 中期・後期の土器(1/4)

(2) 土製品(第20図)。いずれもⅢ層、Ⅳ層出土である。

1 土製円盤(1~24)。24点出土した。周縁が丸く磨滅するもの7点、打ち欠きの状態で角をもつもの17点であった。なお、表面中央に断面円錐形の小孔をもつもの(1)がある。

第1表 土製円盤一覧表

番号	出土区	層位	最大径(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	備考
1	B区	Ⅲ	4.7	0.8	21.3	
2	B区	IV	3.1	1.1	14.1	
3	B区	Ⅲ	3.6	1.1	21.8	
4	D区	Ⅲ	3.5	1.4	22.6	
5	C区	Ⅲ	3.0	0.9	10.9	
6	D区	IV	3.9	1.1	24.0	
7	C区	Ⅲ	4.0	1.2	23.0	
8	Cトレーンチ	Ⅲ	5.7	1.1	40.0	
9	D区	Ⅲ	2.9	1.0	10.4	
10	C区	Ⅲ	5.2	1.1	39.3	
11	D区	Ⅲ	3.2	1.4	18.3	
12	A区	Ⅲ	4.0	1.2	25.9	
13	A区	IV	3.7	1.0	18.3	
14	D区	Ⅲ	3.5	0.9	17.2	
15	B区	IV	3.0	1.0	10.3	
16	D区	IV	3.3	1.1	14.6	
17	E区	不明	3.4	1.2	16.8	
18	B区	IV	5.1	1.3	35.1	
19	A区	IV	3.8	1.0	19.8	
20	C区	Ⅲ	3.6	1.1	17.8	
21	C区	Ⅲ	3.8	1.0	20.2	
22	C区	Ⅲ	2.8	1.0	14.1	
23	Cトレーンチ	Ⅲ	3.0	0.8	10.5	
24	不 明	不明	2.3	0.9	6.7	

2 土偶(25, 26)。2点出土した。25. 腹部である。26に比べ扁平である。腹部に三角状の弧刻文、側面に押引文を施す。現存長4.6cm、最大厚2.1cm。

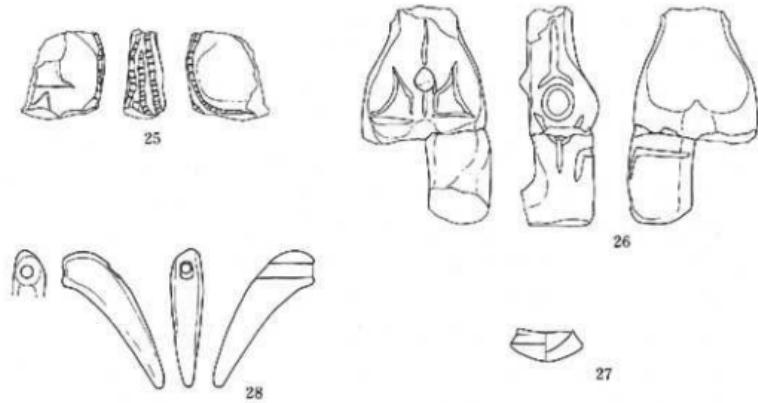
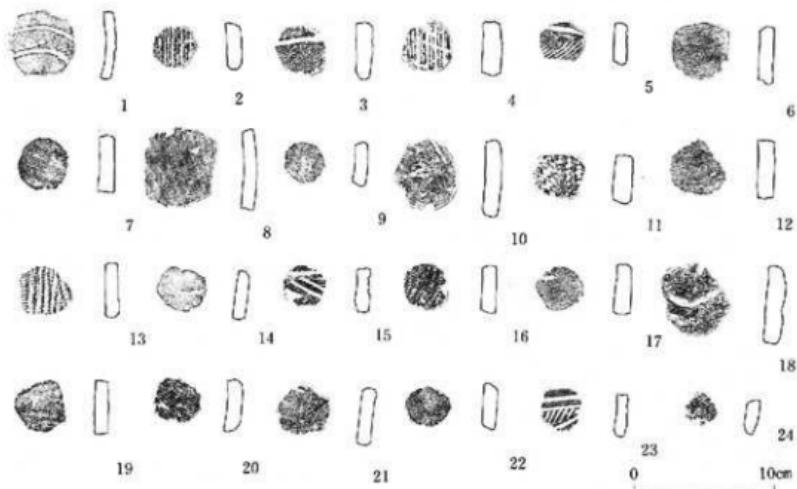
26. 胸部から脚部が残存する。腹部には正中線とヘソを中心に三角状沈線、側面に玉抱三叉文を施す。脚部裏面にも沈線文を施す。現存長11.5cm、最大厚3.5cm。

いずれもつきだした臀部をもち、いわゆる「出尻土偶」と呼ばれる類である。割れ口の観察では、いずれも脚の付根部に分割塊面が認められる。他については単なる割れ口である。

3 ミニチュア土製品(27)。1点出土した。完形。皿状の器形である。口径2.8cm、高さ1.5cm、重さ16g。

4 土笛状土製品(28)。1点出土した。完形。長さ8.5cm、重さ25g。

この他、焼成粘土塊が2点出土している。大きさは3cm大10gのものと4cm大40gのものである。胎土は砂礫が目立つ。



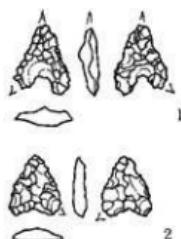
第20図 土製円盤(1/4)・土偶他の土製品(1/3)

### (3) 石器

石器は剥片を除き294点出土した。その大半は打製石斧で占められ、全体の69%を占める。他に黒耀石の剥片が8点出土している。いずれもI層、III層、IV層中から土器片と混在して出土した。本稿ではこのうち79点を図示、報告する。

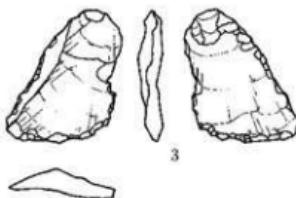
#### 1 石鎌(第21図1、2)。

2点出土した。凹基無茎。先端部・脚部を欠損する。石材は黒耀石。



#### 2 スクレイパー (第21図3)。

1点出土した。完形である。黒耀石製。



#### 3 石匙(第24図41~46)。

6点出土した。いずれも完形。つまみが立て付くものと横に付くものがある。剥離調整は粗い。石材は泥質片岩、粘板岩、ホルンフェルスである。

0 10cm

第21図 石鎌・スクレイパー (1/3)

#### 4 繰器 (第24図47~50)。

5点出土し、いずれも完形である。形態により2種に大別できる。1つは厚みのある平面円形で、全周に剥離が施され石核状となるものである(47, 49)。47は片面に素材面を残す。一方、扁平な形態で、一侧縁に外湾する刃部をもつものがある(48, 50)。剥離調整は両形態とも両面から粗く施されている。石材はホルンフェルスである。

#### 5 打製石斧 (第22図、第23図)。

202点出土した。欠損により形態不明なもの12点、片刃4点を除いた186点について、平面形態から6類(A~F類)に分類できる(右表)。

A類は短冊形を呈するもので出土量の大半を占める。B類は尖頭形で、長さ10cm程度のものである。C類は側縁に抉入部をもつ。この中には「分鋸形」と呼ばれるものも含まれている(35, 36)。D類は平面梢円形を呈するもの

	完形	欠損
A類	55	108
B類	0	3
C類	1	11
D類	3	0
E類	3	0
F類	2	0
小計	64	122
合計		186

である。E類は最大巾を刃部にもち、長軸が最大巾の1.5倍程度のものである。「バチ形」と呼ばれるものであろう。F類は長軸に対し斜位の刃部をもつものである。

一方片刃は「バチ形」に類似した形状と短冊形とに分けられる。いずれも素材面を片面に残し、刃部の形状は外湾(37~39)、直線的(40)である。4点中3点が欠損する。

線状痕が12、17、25、30に見られる。いずれも刃部の表裏に長軸方向に認められる。

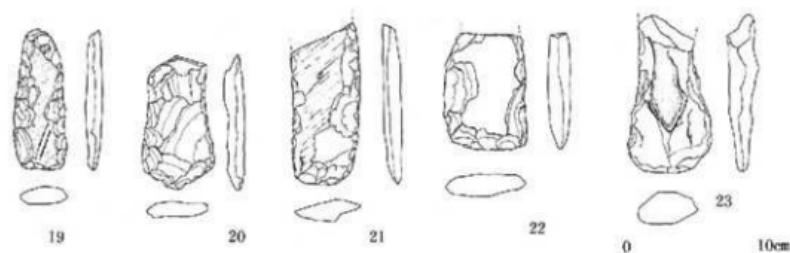
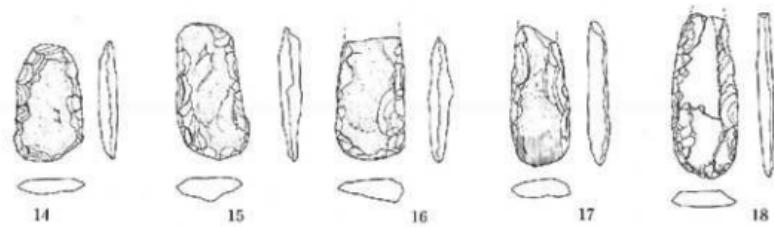
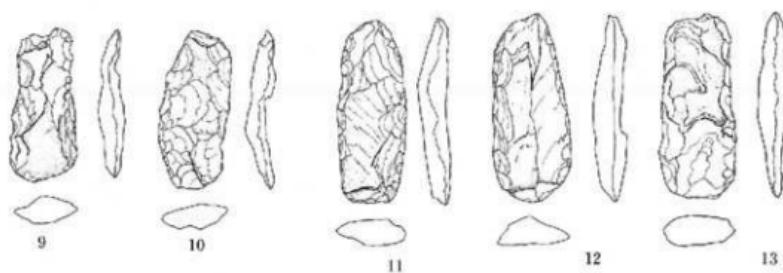
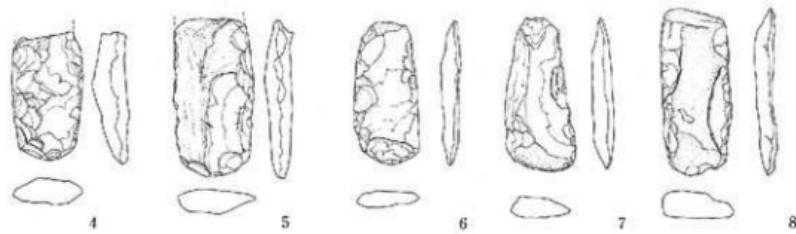
石材は砂岩、ホルンフェルスが大半を占め、他に泥質片岩、粘板岩などである。

- 6 磨石類（第25図51～68）。61点出土し、完形29点、破片32点であった。形態は、平面橢円形で、片面ないしは両面に磨面をもつもの（52～56）、長楕円形ないしは棒状の素材の片面、ないしは両面に磨面をもつもの（57～60）、球形を基調とした小型であり、明瞭な磨面が認められないもの（61～66）がある。これらのうち磨面中央部に点状打痕が認められるもの（54、55）や、側縁に打痕の認められるもの（52、56～59）がある。また、51は表裏面、側面に長軸方向の線状痕が認められる。60は端部両面から粗く打ち欠かれているが、刃部と呼べるほど顕著な稜線は認められない。石材は砂岩、凝灰岩質砂岩、泥質片岩、粘板岩、ホルンフェルス、花崗岩、安山岩、安山岩質溶岩、砂礫岩、凝灰岩、緑色凝灰岩である。
- 7 石皿（第25図69～71）。8点出土した。いずれも破片である。71は明瞭な磨面をもつ。石材は花崗岩、花崗閃綠岩、安山岩質溶岩、玄武岩質溶岩がある。
- 8 磨製石斧（第26図72～75）。4点出土した。いずれも乳棒形状態の破片である。72は剥離痕をもつ基部である。石材は緑色凝灰岩、緑色火山礫凝灰岩質砂礫岩である。
- 9 石錐（第26図76、77）2点出土した。いずれも完形である。両側縁の抉りは、掠り切り（76）、打ち欠き（77）によるものである。石材は泥質片岩である。
- 10 石棒（第26図78、79）2点出土、欠損した胴部。石材は花崗岩、安山岩質凝灰岩である。

第2表 石器一覧表

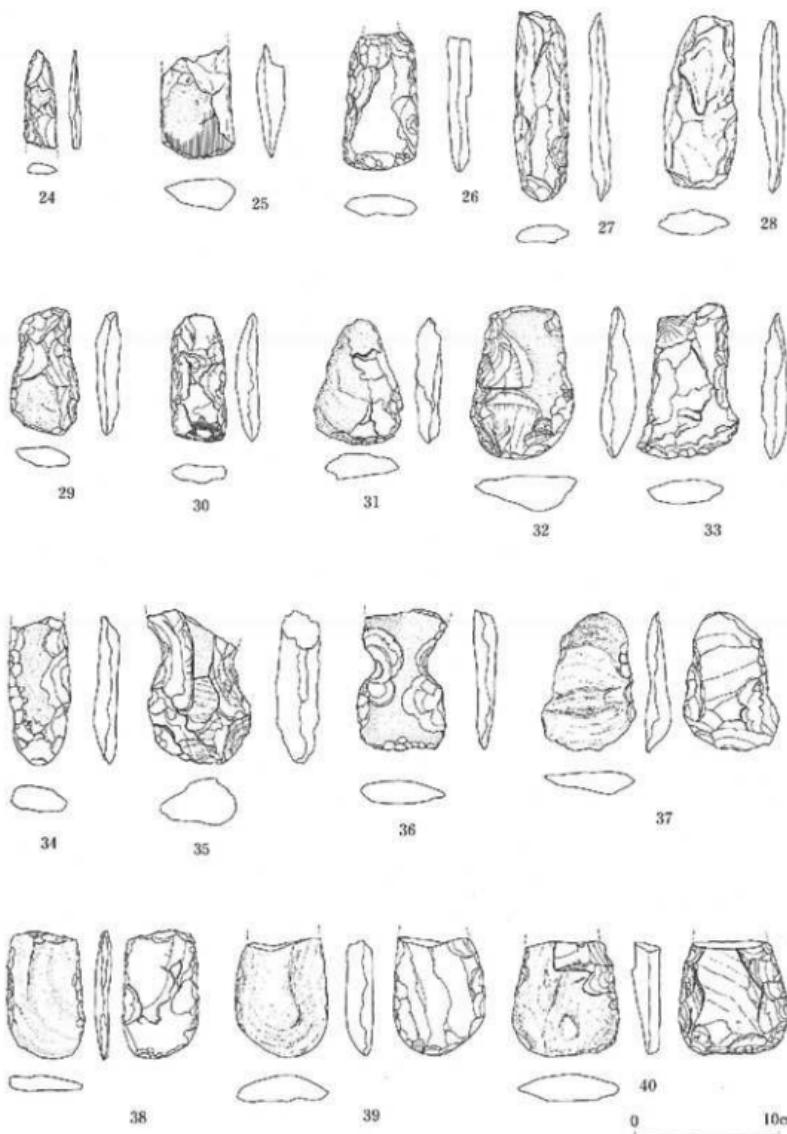
番号	器種	出土区	層位	長さ(cm)	巾(cm)	厚さ(cm)	重さ(kg)	石材
1	石 砧	不明	不明	1, 7	1, 4	0, 5	0, 8(g)	黒羅石
2	"	"	"	1, 5	1, 3	0, 3	0, 4(g)	黒羅石
3	スクレイパー	"	"	4, 0	2, 6	0, 5	2, 0(g)	黒羅石
4	打製石斧	A 区	III	8, 9	5, 0	2, 1	0, 12	ホルンフェルス
5	"	"	"	11, 1	5, 6	1, 8	0, 15	ホルンフェルス
6	"	B 区	"	10, 3	4, 5	1, 3	0, 08	砂 岩
7	"	A 区	"	10, 9	4, 9	1, 6	0, 10	ホルンフェルス
8	"	C 区	IV	12, 0	4, 9	1, 9	0, 13	砂 岩
9	"	"	"	10, 0	4, 8	1, 9	0, 12	砂 岩
10	"	A 区	III	11, 3	4, 9	1, 6	0, 09	砂 岩
11	"	"	"	13, 1	4, 9	1, 9	0, 15	砂 岩
12	"	"	"	13, 5	5, 5	2, 2	0, 18	ホルンフェルス
13	"	E 区	"	13, 2	5, 2	2, 1	0, 18	ホルンフェルス
14	"	A 区	"	8, 4	4, 7	1, 2	0, 07	ホルンフェルス
15	"	B 区	IV	9, 8	5, 2	1, 6	0, 10	砂 岩
16	"	C 区	III	8, 9	2, 9	1, 8	0, 09	粘板岩
17	"	"	"	11, 0	4, 2	1, 2	0, 08	砂 岩
18	"	B 区	"	11, 7	4, 5	1, 1	0, 09	砂 岩
19	"	A 区	"	10, 0	3, 5	1, 3	0, 06	砂 岩
20	"	"	IV	9, 6	5, 2	1, 2	0, 07	砂 岩
21	"	"	"	11, 3	4, 6	1, 4	0, 10	砂 岩
22	"	"	III	8, 4	5, 7	1, 6	0, 12	ホルンフェルス
23	"	D 区	IV	11, 2	5, 8	2, 2	0, 15	ホルンフェルス
24	"	A 区	"	6, 9	2, 1	0, 8	0, 01	砂 岩
25	"	B 区	III	8, 0	5, 1	2, 1	0, 11	凝灰岩質砂岩
26	"	A 区	"	9, 7	5, 0	1, 7	0, 11	凝灰岩質砂岩

27	打製石斧	B 区	III~IV	1 3, 7	3, 7	1, 3	0, 0 9	新玉(チエト?)
28	"	A 区	IV	1 2, 3	5, 0	1, 7	0, 1 1	ホルンフェルス
29	"	B 区	III	8, 9	4, 7	1, 4	0, 0 8	砂岩
30	"	D 区	IV	8, 9	3, 9	1, 3	0, 0 7	凝灰質砂岩
31	"	C 区	III	9, 0	6, 2	1, 7	0, 1 0	砂岩
32	"	D 区	IV	1 0, 9	7, 4	2, 5	0, 2 2	砂岩
33	"	"	III	1 1, 1	7, 1	1, 8	0, 1 6	ホルンフェルス
34	"	F 区	不明	1 0, 6	4, 4	1, 6	0, 1 2	砂岩
35	"	E, F	I	1 1, 0	7, 3	3, 2	0, 2 9	ホルンフェルス
36	"	"	II	1 0, 0	6, 3	1, 7	0, 1 5	ホルンフェルス
37	"	A 区	IV	9, 9	6, 5	1, 6	0, 0 9	ホルンフェルス
38	"	Clivage	III	9, 2	5, 5	1, 1	0, 0 7	ホルンフェルス
39	"	A 区	IV	7, 9	6, 5	1, 9	0, 1 5	ホルンフェルス
40	"	B 区	III	8, 0	7, 5	2, 0	0, 1 6	ホルンフェルス
41	石匙	E 区	"	6, 6	7, 1	1, 3	0, 0 6	砂岩
42	"	C 区	III	7, 1	9, 1	1, 1	0, 0 6	粘板岩
43	"	C 区	"	6, 4	9, 4	1, 2	0, 0 8	砂岩
44	"	不明	"	7, 7	9, 3	1, 8	0, 1 0	ホルンフェルス
45	"	C 区	III	6, 5	9, 4	1, 1	0, 0 6	ホルンフェルス
46	"	A 区	IV	9, 1	4, 2	1, 3	0, 0 5	砂岩
47	罐器	F 区	I	8, 1	8, 4	3, 9	0, 3 3	ホルンフェルス
48	"	不明	不明	1 0, 0	1 1, 7	3, 1	0, 3 4	ホルンフェルス
49	"	E 区	"	8, 7	8, 3	5, 6	0, 3 6	ホルンフェルス
50	"	不明	I	1 3, 0	1 1, 3	4, 6	0, 6 9	ホルンフェルス
51	磨石頭	C 区	III	5, 9	4, 0	2, 2	0, 0 4	絶滅種
52	"	Clivage	不明	8, 2	5, 5	2, 6	0, 1 9	花崗岩
53	"	不明	"	9, 6	8, 4	4, 8	0, 5 7	硬石英砂岩
54	"	E 区	"	1 0, 1	8, 3	4, 2	0, 4 5	球根鉆
55	"	B 区	IV	9, 6	7, 9	5, 3	0, 6 9	ホルンフェルス
56	"	E, F	I	1 2, 1	9, 3	6, 3	1, 1 7	凝灰岩
57	"	B 区	III	1 1, 0	5, 5	2, 8	0, 3 0	緑色凝灰岩
58	"	不明	不明	1 3, 0	5, 9	3, 6	0, 3 9	安山岩質溶岩
59	"	E 区	"	1 2, 8	5, 3	4, 9	0, 5 7	花崗岩
60	"	B 区	III	1 7, 0	8, 1	5, 8	1, 2 6	顎頭鉆
61	"	Clivage	III	2, 4	3, 6	2, 0	0, 0 4	硬砂岩
62	"	D 区	IV	4, 6	4, 9	4, 1	0, 1 3	球根鉆
63	"	C 区	III	6, 3	3, 5	2, 7	0, 0 8	ホルンフェルス
64	"	"	"	5, 6	4, 6	2, 5	0, 0 6	球根鉆
65	"	B 区	IV	5, 6	3, 3	2, 5	0, 0 7	球根鉆
66	"	F 区	不明	6, 9	3, 7	2, 6	0, 1 0	ホルンフェルス
67	"	C 区	III	8, 9	1, 2	1, 3	0, 0 3	硬砂岩
68	"	B 区	IV	9, 7	7, 5	5, 8	0, 4 4	玄武岩質溶岩
69	石皿	D 区	"	8, 9	9, 9	8, 6	0, 8 0	玄武岩質溶岩
70	"	"	III	1 4, 3	1 3, 3	7, 2	1, 6 9	玄武岩質溶岩
71	"	F 区	不明	1 1, 6	1 8, 1	6, 6	1, 7 0	玄武岩質溶岩
72	磨製石斧	不明	"	4, 4	2, 4	2, 6	0, 0 4	緑色凝灰岩
73	"	E, F	I	5, 0	4, 7	2, 5	0, 1 0	緑色凝灰岩
74	"	不明	不明	8, 5	3, 4	4, 0	0, 1 6	凝灰質砂巖
75	"	"	"	3, 4	4, 8	4, 8	0, 1 0	緑色凝灰岩
76	石鍬	Clivage	III	6, 2	4, 4	1, 0	0, 0 5	泥質片岩
77	"	B 区	IV	7, 0	4, 6	1, 3	0, 0 6	泥質片岩
78	石捧	C 区	III	8, 3	8, 3	8, 0	0, 8 3	知床鱗
79	"	B 区	III	2 6, 0	1 9, 5	1 5, 0	1 3, 0	花崗岩



0 10cm

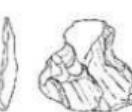
第22図 打製石斧 (1/4)



第23図 打製石斧 (1/4)



41



42



43



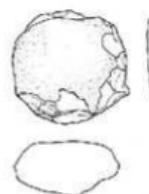
44



45



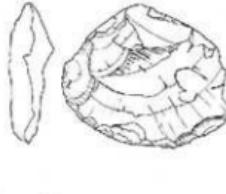
46



47



48



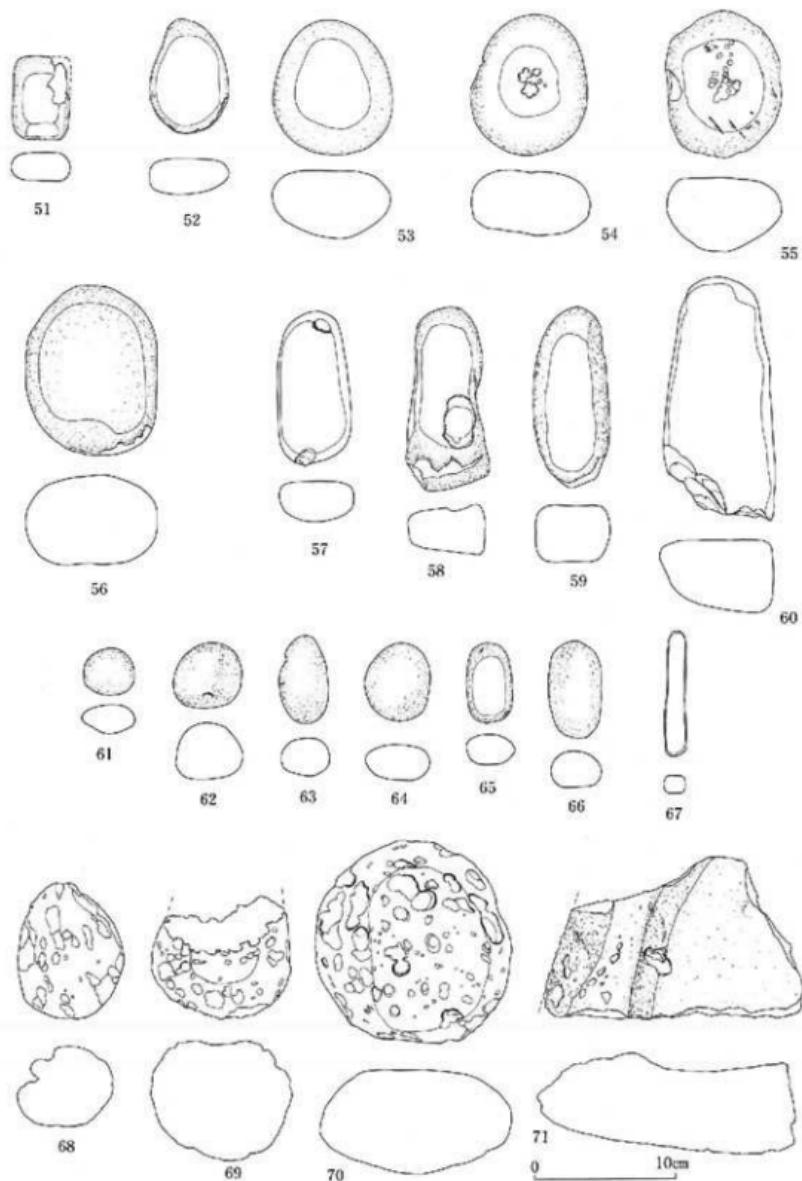
49



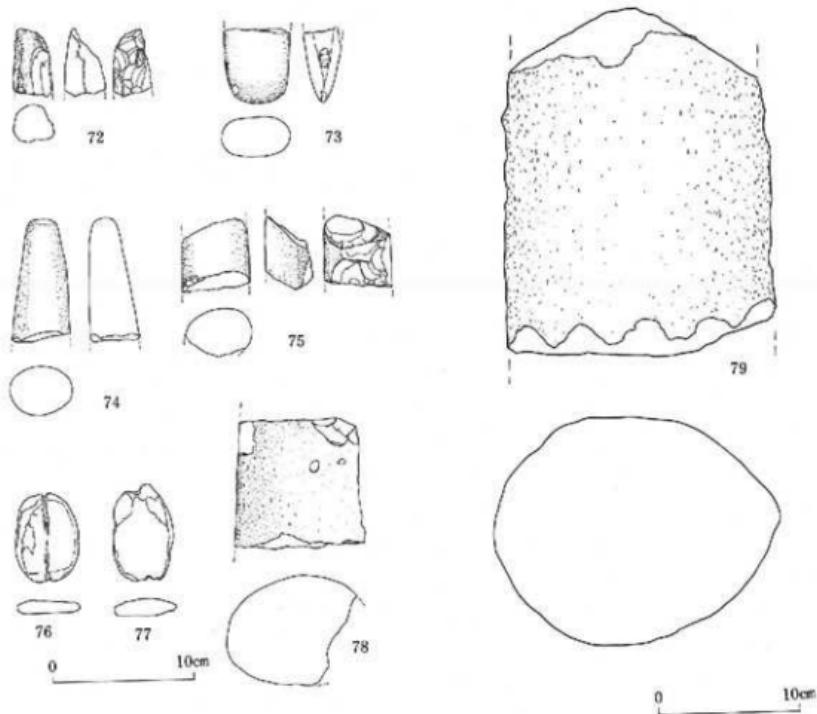
50

10cm

第24図 石匙、礫器(1/4)



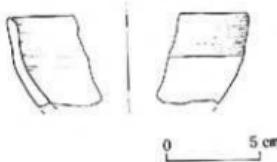
第25図 磨石類・石皿 (1/4)



第26図 磨製石斧・石鎌・石棒 (1/4)

## 第2節 古墳時代

土師器の壺形土器片が1点出土した(第27図)。口縁部は直立気味にたちあがり、体部は丸い。口縁部は横撫で、体部外面は横方向の手持ちヘラ削りが施される。胎土は砂粒を含む。色調は褐色、焼成は良好である。



第27図 古墳時代の土器 (1/3)

# 第V章 まとめ

## 第1節 土器

出土量の多かった縄文中期土器群のうち第III群～第VI群について概要をまとめてみたい。

第III群第1類（藤内式期）。縦位区画文や、楕円横帯文、抽象文、縄文、無文などをそれぞれ主文様とした深鉢がある。また、口縁部に三角区画文を設け、キャタピラ文で充填するといった文様構成をもつ36がある。

d種とした楕円横帯文の土器のうち、胴部に縄文をもち頸部ないし口縁部に楕円帯をもつものは、器形などからさらに細分できる。すなわち、内湾する口縁部をもつ例（38、39）、口縁部で屈曲する例（37）である。前者はとくに関東地方に盛行したタイプとされ（川上）、山梨県内では塩山市重郎原遺跡に類例がある。後者はその把手や隆帯に強い装飾性が認められる。

第IV群第2類（井戸尻式期）。太沈線文と隆帯文による浮彫風の文様をもつ深鉢（a種）と縄文を主とした深鉢（b種）がある。a種の深鉢59は、把手部は他の土器群と同様に浮彫風の文様をもつものの、本体の主文様が貼付紐により構成される点は他に認められないことから別系統でとらえられる土器である。一方、容量に違いはあるものの同一器形に類似する文様構成をもつ41、47のように強い関連性が指摘できる土器も含まれるなど、該期の土器組成の複雑さを窺わせる。

b種、縄文を主とした深鉢はキャリバー形と胴部のくびれない器形とがある。前者には装飾性の強い把手が付く。顔面把手（84）や団扇状の把手（83）もこれと同じ類であろう。一方後者は口縁部から胴部にかけて垂下する貼付紐により文様が区画される。

第IV群（曾利式期）。貼付紐と条線を特徴とする一群（第1類）、口縁部の渦巻、ないしは楕円形の文様を特徴とする一群（第5類）、口縁部以下に斜向する短沈線を配する一群（第7類）が数量的に多く出土している。他に頸部に把手をもつ沈線文主体の土器（第4類119）や、波状沈線文を口縁部に巡らす土器（第6類）、磨消縄文を特徴とする一群（第9類）が出土している。第6類は関東西南部の加曾利E式土器に伴出する「連弧文土器」と呼ばれるものである。第9類、および口縁部以下に「匁」字状の沈線区画を配する深鉢（第8類123）は中期末葉に位置付けられよう。

第V群（浅鉢）、第VI群（壺）。浅鉢には無文のものと口縁部に装飾性の強い文様をもつものとがある。壺としたものでは有孔鍔付き土器（90）、胴中位で屈曲する小型壺（91）、胴部が球形に近い土器（92）がある。90、91の穿孔は焼成前に行われたものである。92は、縄文を沈線と磨消により縦位に区画するものである。これは49の深鉢、縄文上端を沈線と磨消により円弧状に区画する手法に類似する。浅鉢と壺は井戸尻式期に位置付けておきたい。

## 第2節 土器の出土状況（第28図～第30図）

本遺跡の特徴として、遺構を伴わずに土器や石器が集中的に多量に出土したことが上げられる。時期別の数量をここで具体的に提示できなかったが、縄文中期前葉の新道期から出土量が増え、中期中葉から後葉にかけてピークとなり、後期中葉に至って急激に出土量が減少しており、時期的に偏在する傾向が認められる。また、土偶や土製円盤、土笛状などの土製品や石棒など非日常的とされる遺物が出土していることも特徴の1つである。破片の中には未製品の深鉢片（30）が含まれていた。胎土は「スカスカ」の状態であり、他に比較して軽量となっている。このような粗雑なつくりであったため土器焼成時に破損したものと考えられる。焼成粘土塊の出土と合わせて考える必要があろう。

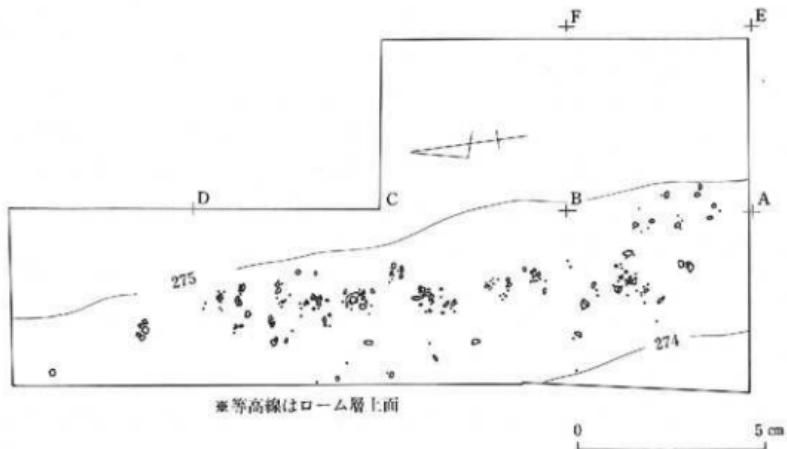
遺物は発掘区全体より出土したが、とくに斜面がテラス状に緩やかな場所で多量に出土した。（第28図、第29図）。出土層位はI層、III層、IV層中である。I層中の出土は全て旧斜面上方にあたるE、F区においており、遺物の内容が全く同質であることからIII層、IV層中の遺物が工事等により人为的攪乱を受け混入したものと言える（註1）。出土の大半はIII層、IV層中であったが、とくにIII層中において顕著であった。III層、IV層出土の遺物に時期的な違いは全く認められず、後述するように同一遺物が両層にまたがって接合する例も多く認められた。

グリット別の出土土器重量はつぎのようになっている。A区48.4kg、B区36.5kg、C区31.1kg、D区25.6kg、E、F区35.9kg。大半は接合しないバラバラの状態であったが、このうちIII層中における土器接合状況をまとめると図1のようになる。なお、第II章で述べたように、出土遺物のうち細片のほとんどは5m区画のグリット一括で取り上げており、出土位置と標高を計測したものは主に比較的大きな破片、あるいは集中的に出土した破片を対象としている。このためここで述べる観察結果も大まかな傾向としてとらえていただきたい。第30図より接合状況の特徴をまとめるとつぎのように大別できる。

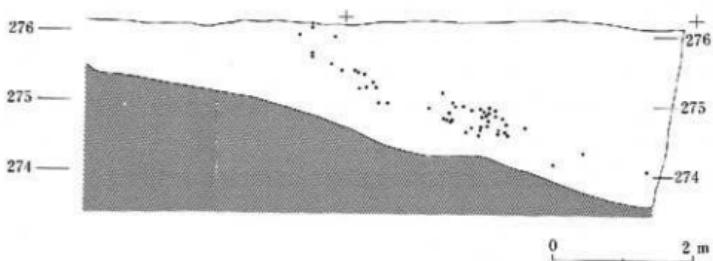
A 完形品に近い1個体ないしは2個体の土器が同一地点に固まって出土する。この中には数点の細片と距離をおいて接合するものも含まれる。

B 細片同士が距離をおいて接合する。

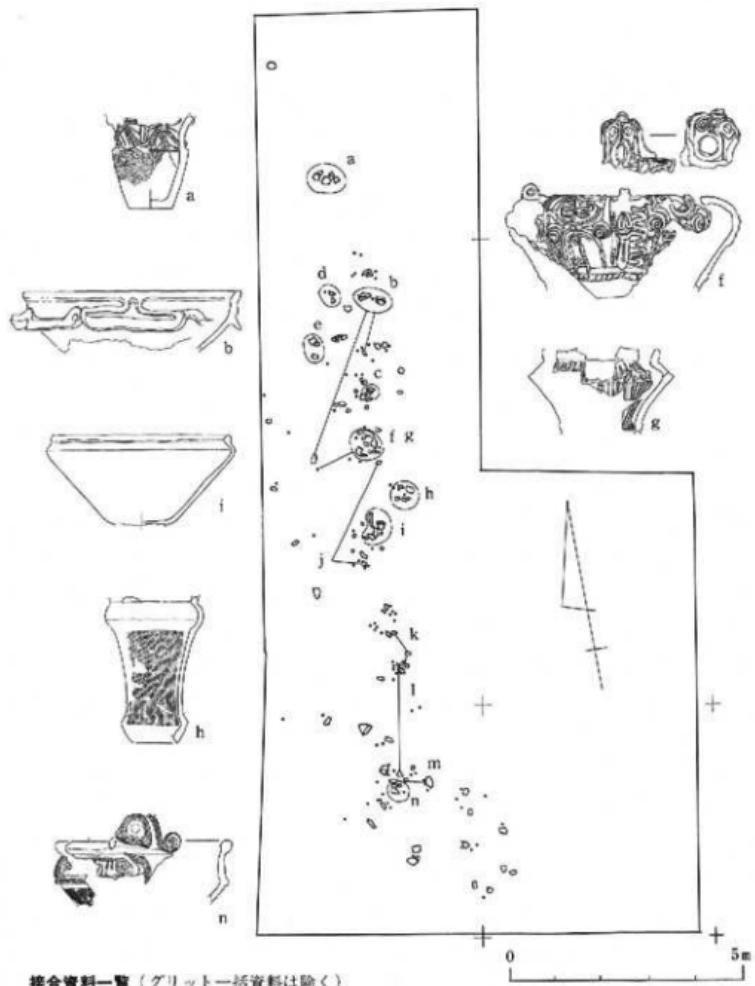
Aの例については第30図中、fの深鉢（48）、bの浅鉢（87）に最大4mの接合距離が認められるが、これは斜面地という地形的な要因によるものと考えられ、細片が斜面下方に散っている状況を考えることができよう。基本的には同一地点で出土する傾向が見られる。なお2個体が同一地点で出土した例（43,48）があるが、他はいずれも1個体で遺存する。一方、いずれの接合資料も完全に復元できるものは無かった。



第28図 遺物出土状況（平面図）



第29図 遺物出土状況（断面図 A区・E区）



接合資料一覧（グリット一括資料は除く）

分類	器種、部位	報告番号
a	深鉢、胴部	4 2
b	第V群 浅鉢、口縁部～胴上半部	8 7
c	第IV群 深鉢、口縁部～頸部破片	1 2 0
d	” 深鉢、頸部破片	1 1 9
e	第三群 深鉢、口縁部～胴上半部	4 7
f	” 深鉢、口縁部～胴上半部	4 8
g	深鉢、口縁部～胴上半部	4 3

分類	器種、部位	報告番号
h	深鉢	5 3
i	第V群 浅鉢	8 5
j	第四群 深鉢、把手部	4 5
k	深鉢、口縁部～胴上半部破片	31～34
l	深鉢、把手部（井戸尻式期）	—
m	深鉢、胴下半部	6 6
n	深鉢、口縁部～胴上半部	3 7

第30図 土器接合状況

Bの例については第30図中、1の把手部のように最大3mの接合距離が確認できる。また本図に示すことができなかつたが、土偶(26)は脚部と胸部とが同一グリット内(C区)で接合している。

なお第30図の接合資料には、図示した他に出土位置をドットできなかつたグリット一括遺物も含まれている。こうした破片を観察するとIV層中に含まれていた破片もあり、異なる層位間でも接合していることが認められる。例えば、aはD区IV層、gはB区IV層、kはA区IV層、nはA区IV層中の破片とそれぞれ接合している。

(註1) 本来ならば近・現代層中出土の遺物は分けて報告すべきであるが、前述したことが認められるため本書では一括して報告している。

### 第3節 石器の石材について

石器の石材は多様であった。これは、本遺跡が小仏山地と丹沢山地との接点地域という、桂川(相模川上流)流域の地質的特徴に由来するものであろう。今回、都留文科大学地学研究室の上杉陽氏に特徴的と思われた石器石材を肉眼鑑定していただいた。その結果に基づき各石器の石材について特徴をまとめるとつきのようになる。なお、文責はすべて小西にある。

石鎌、スクレイパー、剥片は全て黒耀石が用いられており、チャートは見られない。

打製石斧の大半は砂岩、および砂岩より変質したホルンフェルスで作られている。他に粘板岩、泥質片岩、および泥岩より変質したホルンフェルスがある。これらの石材は全て本遺跡北方に広がる小仏山地系(<sup>小1)</sup>である。

石匙は粘板岩、泥質片岩、および泥岩より変質したホルンフェルスがある。小仏山地系。

石錘は泥質片岩である。小仏山地系。

礫器は全て砂岩もしくは泥岩より変質したホルンフェルスが用いられていた。小仏山地系。

磨石類の石材は多様であり、とくに主体を占める石材はない。このうち、砂岩、粘板岩、泥質片岩、砂岩もしくは泥岩より変質したホルンフェルスは前述小仏山地系の類である。安山岩、安山岩質溶岩は藤ノ木愛川構造線(<sup>小2)</sup>沿いに貫入した大倉安山岩と呼ばれる類や、西桂層、丹沢層群系の可能性をもつ類である。凝灰岩には本遺跡南方に広がる丹沢山地系の緑色凝灰岩が含まれていた。

石皿は富士山系の溶岩が主体を占める。花崗閃綠岩は丹沢山地系に多く見られるものである。

磨製石斧は緑色凝灰岩が主体であり、これは丹沢山地系である。

石棒のうち安山岩質凝灰岩は丹沢山地系のものである。

以上の諸特徴を概観すると、石材は小仏山地系と丹沢山地系に大別できそうである。総じて小仏山地系の石材が多く用いられており、とくに打製石斧、石匙、石錘、礫器にこの傾向が顕

著であった。粘板岩や泥質片岩は層状に剥離する性質をもつことから、扁平形態の石匙、石錐には適当な材質と言えよう。一方、丹沢山地系の石材は、磨石類や磨製石斧、石皿、石棒に見られる。このうち磨石類は両山地系の石材が拮抗しているように見えるが、これは、磨石類とした中に形態のバラエティーが認められることから、各種の使用形態にもとづき石材の使いわけがなされた結果といえる。磨石類についてはさらに形態による細分が必要であろう。

(註1) 小仏山地系に属する小仏層群は藤ノ木愛川構造線北側に広がり、砂岩、泥岩、チャート、石灰岩、砂礫岩などから構成されている。

(註2) 山梨県東八代郡御坂町藤ノ木より神奈川県愛川町に及ぶ断層である。上野原小学校遺跡の北方約1kmに位置する。

本遺跡では、これまでに縄文中期から後期を中心とした遺物が知られていたが、本調査で改めてその内容を確認することができた。遺構こそ発見できなかったものの遺物面においては比較的まとまった資料を確認することができたうえ、この中には顔面把手や動物意匠文をもつ土器群、土偶などの土製品といった当時の精神生活を窺わせる資料が含まれる他、打製石斧の多量出土など、総じて中期中葉から後葉にかけて特有とされる遺物相が確認できた。

## 参考文献

- 『上野原町誌(上巻)』上野原町誌刊行委員会 1975  
仁科義男他『甲斐志料集成』  
『百年史』上野原小学校 1974  
谷口康浩「勝板式土器様式」『縄文土器大観2』1988  
中山誠二他『関山遺跡I、II』山梨県埋蔵文化財センター 1988  
田中悟道『川合遺跡、関山遺跡』上野原町教育委員会 1989  
濱澤亮他『藤野町櫻塚遺跡』藤野町教育委員会 1987  
小野正文他『糸庭堂II』山梨県教育委員会 1987  
田代李他『第9回特別展 縄文土器その心象世界』山梨県立考古博物館 1991  
鈴木次郎「打製石斧」『縄文文化の研究7』1983  
末木健「曾利式土器」『縄文文化の研究4』1981  
神奈川考古同人会『シンポジウム縄文時代中期後半の諸問題』神奈川考古第11号 1981

# 図 版

## 図版 1



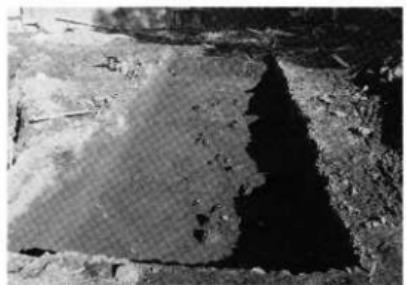
1

- 1 遺跡周辺航空写真。昭和初期の撮影。矢印に上野原小学校遺跡がある。(西から)
- 2 発掘区遠景。発掘区は丘陵西斜面に位置する。正面は警察署員舎。(南から)
- 3 発掘区近景。田畠中における遺物の出土状況である。(南から)
- 4 発掘区北壁断面。(南から)
- 5 遺物出土状況。B区Ⅲ層中。左端は遺物番号48の深鉢である。(東から)
- 6 遺物出土状況(遺物番号48)。逆位につぶれた状況である。(東から)
- 7 遺物出土状況。E区Ⅲ層上面。中央は打製石斧(遺物番号36)。(南から)
- 8 遺物出土状況(遺物番号47)。C区Ⅲ層中。(西から)
- 9 土偶出土状況(遺物番号26)。C区Ⅲ層中。(北から)
- 10 調査風景



2

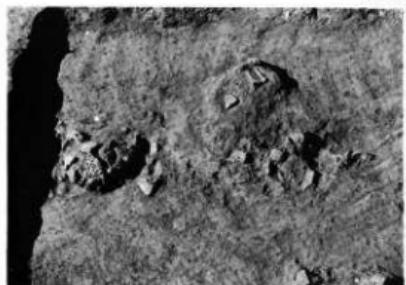
図版 2



▲ 3



▲ 4



▲ 5



▲ 6



▲ 7



▲ 8



▲ 9



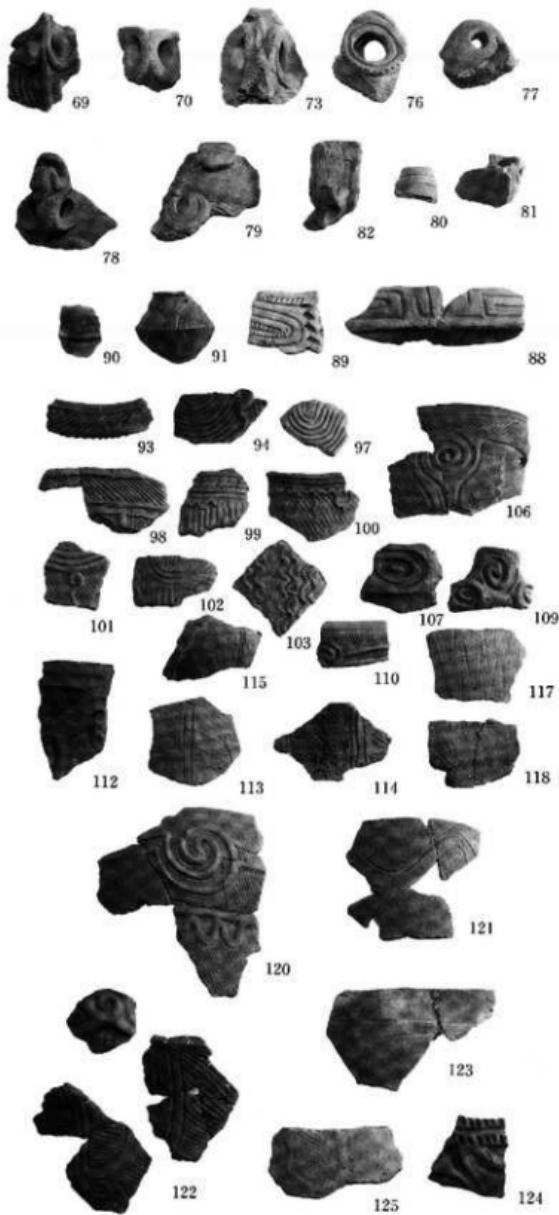
▲ 10

図版3



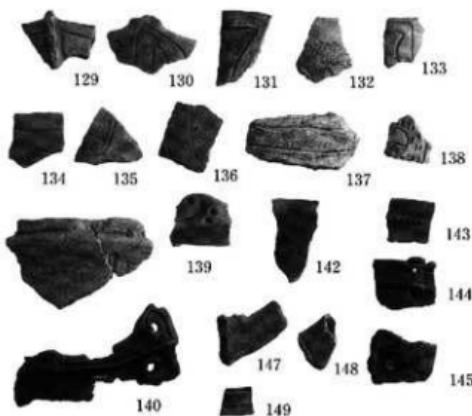
出土土器（1）

図版4

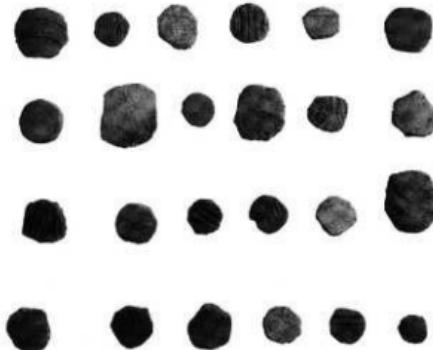


出土土器（2）

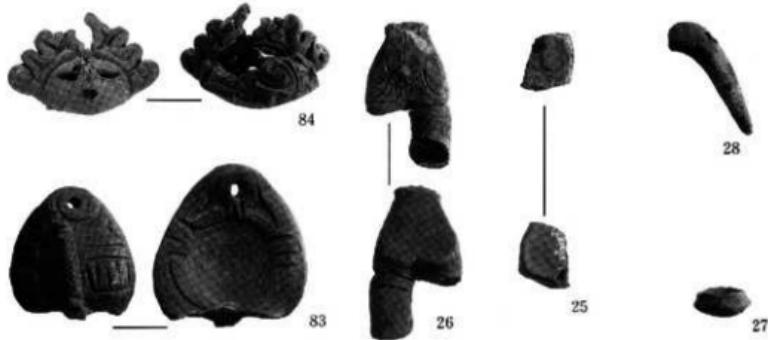
図版 5



出土土器 (3)



土製円盤 (1~24)

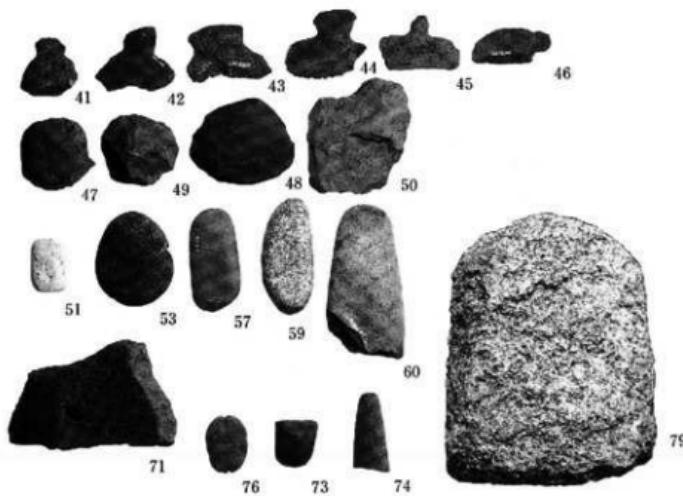


把手部・土偶、土笛状土製品、ミニチュア土製品

図版 6

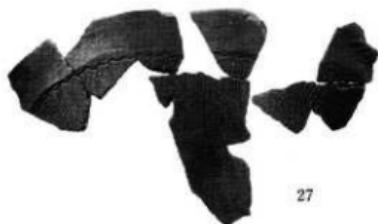


打製石斧(4~40)



出土石器

図版 7



27



35



36



37



38



39



40



41

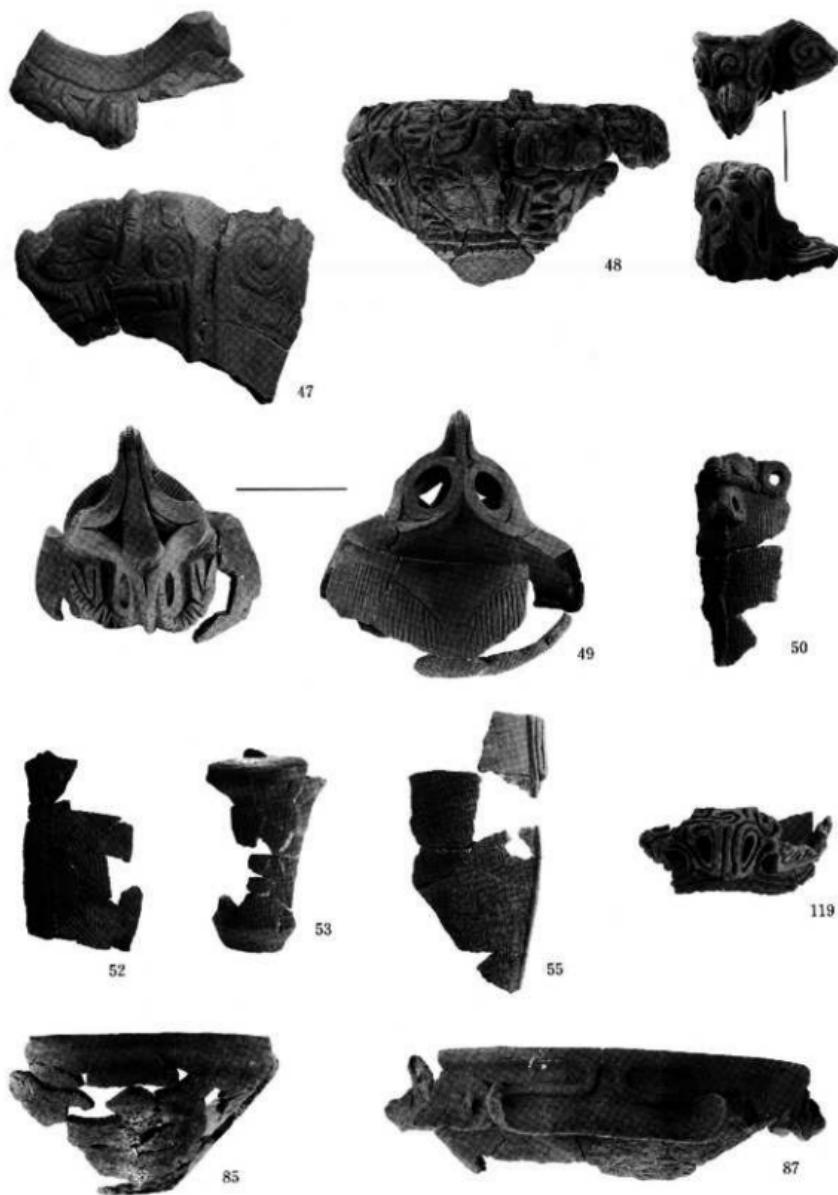


42



43

図版 8



---

**上野原小学校遺跡**

1993年3月31日

編集・発行 上野原町教育委員会

山梨県北都留郡上野原町上野原3504-1

TEL 0554-62-3111

印 刷 第一法規出版株式会社

---

